

県単道路改良事業一般県道向瀬杉野屋線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

宝達志水町

竹生野フルヤシキ遺跡

2009

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

たこの
竹生野フルヤシキ遺跡

2009

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター



竹生野地区の空中写真



調査区全景



遺構の近景

例 言

- 1 本書は竹生野フルヤシキ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は羽咋郡宝達志水町（旧押水町）竹生野地内である。
- 3 調査原因は一般国道471号の道路特殊改良1種工事であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は、現地調査を石川県立埋蔵文化財センターが昭和62（1987）年度に実施し、出土品整理、報告書刊行を財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成19、20（2007、2008）年度に実施した。
- 5 調査に係る費用は、石川県土木部道路建設課が負担した。
- 6 現地調査は昭和62年度に実施した。期間・面積・担当者は下記のとおりである。
期 間 昭和62年10月15日～同年12月26日
面 積 640㎡
担当者 垣内光次郎（主事）
- 7 出土品整理は平成19年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書の作成・刊行は平成20年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は垣内光次郎（調査部特定事業調査グループリーダー、職名は平成20年度）が行った。
第1・2章 垣内光次郎
第3章 垣内、岩瀬由美（調査部特定事業調査グループ係主査）
挿図・遺構図版作成 垣内、酒井 中（調査部調査補助員）
遺物図版作成 岩瀬
遺物写真撮影 酒井
- 9 第1章第1図及び第2章第3図については、宝達志水町教育委員会の許可を得て『石川県羽咋郡宝達志水町 末森城等城館跡群 発掘調査等報告書』（末森城等城館跡群調査委員会・宝達志水町教育委員会2007年刊行）5・67頁より転載し、一部改変して掲載した。
- 10 調査には下記の機関の協力を得た。
石川県土木部道路建設課、宝達志水町教育委員会
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - （1）方位は磁北である。
 - （2）水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。単位はm。
 - （3）出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 発見と調査に至る経緯	1
第2節 現地調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 位置と地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺構と遺物	6
第1節 概 要	6
第2節 遺 構	6
第3節 遺 物	9
第4節 小 結	11

挿図目次

第1図 石川県宝達志水町の位置図	1	第11図 出土遺物実測図1 (S=1/3・1/6)	19
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)	4	第12図 出土遺物実測図2 (S=1/6)	20
第3図 竹生野地区周辺の調査箇所 (1/12,000)	5	第13図 出土遺物実測図3 (S=1/3)	21
第4図 遺構配置図 (S=1/240)	12	第14図 出土遺物実測図4 (S=1/3)	22
第5図 遺構実測図1 (S=1/60)	13	第15図 出土遺物実測図5 (S=1/3)	23
第6図 遺構実測図2 (S=1/60)	14	第16図 出土遺物実測図6 (S=1/3・1/6)	24
第7図 遺構実測図3 (S=1/60)	15	第17図 出土遺物実測図7 (S=1/3)	25
第8図 遺構実測図4 (S=1/60)	16	第18図 出土遺物実測図8 (S=1/3・1/6)	26
第9図 遺構実測図5 (S=1/60)	17	第19図 出土遺物実測図9 (S=1/3)	27
第10図 遺構実測図6 (S=1/60)	18	第20図 出土遺物実測図10 (S=1/3・1/6)	28

表目次

第1表 遺跡地名表	4	第2～5表 遺物観察表1～4	29～32
-----------	---	----------------	-------

図版目次

巻頭図版1 竹生野地区の空中写真		図版8 1号溝第1セクション、2・3号溝土層断面、2号溝遺物出土状況	
巻頭図版2 調査区全景、遺構の近景		図版9 1号溝完掘状況、2・3号溝完掘状況	
図版1 遺跡周辺の航空写真、調査前風景		図版10 5号溝完掘状況、室状遺構完掘状況	
図版2 調査区遠景、調査区完掘状況		図版11 東方試掘トレンチ(下段)近景、同上土層断面、東方試掘トレンチ(上段)近景	
図版3 表土除去作業、遺構検出作業、遺構掘削作業、遺構掘削作業、調査区完掘状況		図版12 遺物1	
図版4 A・B1～3区完掘状況、A・B1～4区完掘状況		図版13 遺物2	
図版5 A・B3区完掘状況、拡張区完掘状況		図版14 遺物3	
図版6 1号土坑上層礫群出土状況、3・4号土坑完掘状況			
図版7 5～7号土坑・3号溝完掘状況、6号土坑底板検出状況、8～10号土坑完掘状況			

第1章 調査の経緯と経過

第1節 発見と調査に至る経緯

竹生野フルヤシキ遺跡は、^{はくい ほうだつしみず たこの}羽咋郡宝達志水町竹生野地内を通過する国道471号の道路改良を昭和62（1987）年に計画した石川県土木部道路建設課（担当、旧羽咋土木事務所）が、石川県立埋蔵文化財センターへ埋蔵文化財の分布調査を依頼し、その試掘調査で新たに発見された遺跡である。発見時から現地調査の期間は「竹生野遺跡」の名称で取り扱われていたが、平成4（1992）年の『石川県遺跡地図』改訂のなかで、地区の小字名を付加することで「竹生野フルヤシキ遺跡」へ改名された。また、本遺跡の発掘調査は、旧押水町地内の改良工事を急ぐ道路建設課の強い要望により、発見の翌月には現地調査が実施される運びとなった経緯がある。



第1図 石川県宝達志水町の位置図

当時、県土木部においては、国土交通省が宝達志水町内で進めていた押水バイパスに接続する道路網の整備が急務の課題であった。

この押水バイパスとは、金沢市から七尾市へ向かう一般国道159号のなかでも、河北郡の旧高松町から羽咋郡の旧志雄町の区間において、交通渋滞がみられることから国道機能の向上と地域開発の発展に寄与することを目的に、旧押水町内で建設が進められた新設の幹線道路であった。建設の規模は、総延長7.06km、幅員17mで、昭和59（1984）年には、竹生野地内に近い吉田地区から上田出の区間が供用され、本遺跡で発掘調査を実施した昭和62年の頃には、3年後の1990年の全線開通を目指し、旧押水町の各所で事業の進捗が図られていた。

県土木部道路建設課から竹生野地内の埋蔵文化財分布調査の依頼を受けた県立埋蔵文化財センターは、昭和62年9月1日にJR七尾線から東方向約300mの道路建設予定地内の分布調査を重機による試掘調査で実施した。その結果、JR七尾線に隣接する約600㎡の事業区域で、弥生時代から中世の集落遺跡とみられる遺跡を新たに発見し、その東方約240～260m区間で土器の散布を確認した。

調査の結果は、直ちに道路建設課へ連絡された。押水バイパスに接続する国道471号の道路改良を急ぐ同課からは、現地調査の早期着手の要望が出された。

第2節 現地調査の経過

本遺跡の発掘調査を要望した道路建設課との協議の結果、県立埋蔵文化財センターでは既に進行していた発掘調査の計画を変更し対応することになった。具体的には、同課からの依頼で現地調査を実施していた羽咋郡志賀町所在の北吉田ノノメ古墳群の発掘作業を中断し、その調査班を本遺跡の現地調査に充てる計画を決定した。

同年10月15日に開始した現地調査は、同年12月26日に終了した。最終の調査面積は、新設道路の区域600㎡と、これに取付く町道拡幅部分の40㎡を加えた640㎡となった。また、本遺跡の東方約240～260m区間で確認した散布地は、東調査区として扱いトレンチ法による確認調査を実施したところ、水田の整備過程に土器細片を含む土層が堆積したものであることが確認された。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

竹生野フルヤシキ遺跡は、石川県羽咋郡宝達志水町竹生野地内に位置する集落遺跡で、弥生時代後期から江戸時代の遺構や遺物が発掘調査で確認されている。このため本遺跡が形成された土地空間と周辺の地理的な環境を観察したい。

石川県の行政区域は、古代に設置された加賀国と能登国を併せた範囲を踏襲しており、県域の北半を占める能登半島は能登国の領域であった。また、日本海へ大きく突出している能登半島は日本海域でも最大の半島で、その基部に位置して倶利伽羅峠から中能登の七尾市へ連なる嶺線は、北加賀の三国山から能登最高峰の宝達山（標高637.4m）を経て、山岳寺院の石動山へと続く山並みとなり、古くから能登と越中の国境であった。

この山並みの丘陵地においては、谷間から流下した小規模な河川が幾筋も流れ下り、河川中流から下流域にかけて、小規模な扇状地や低湿地を形成している。とくに、宝達志水町の南部を流れる大海川、前田川、宝達川、相見川は、宝達山の丘陵地から西方へ流下する小河川で、流程10km未満の流域には縄文や弥生のムラ、古墳群や中世城館跡などの展開がみられる。各河川の流域が地域的なまとまりを持ち、歴史が展開する舞台となった土地空間であることが知られる。

本遺跡が所在する宝達志水町の竹生野地区は、宝達山北部の丘陵から流出した流程約6kmの相見川の中流北岸にあって、洪積台地の西端部に所在する。周囲の丘陵は、宝達山系の北西に位置する末森山（標高138m）から派生したもので、末森山頂には戦国期末の「末森の合戦」で知られている要害があり、県の指定史跡として保存されている。また、竹生野地区の家並みは、本遺跡よりも少し高い標高16m前後の洪積台地の平坦地に広がる。集落内の地目としては畑地が多く、相見川沿いの沖積低地や丘陵間の開析谷には、水稻を生産する湿田が展開する。

竹生野地区を南側へ流れる相見川は、川幅6～10mほどの小河川であり、本遺跡の南方約300mの地点で、JR七尾線を過ぎた付近からは流れが弱まり、兩岸を内列砂丘に囲まれた標高3～5mの水田部を経て日本海へ直接注いでいる。また、本遺跡の周辺の丘陵地では、押水バイパスの建設に際して発掘調査が進められた結果、弥生～古墳時代の集落遺跡や墳墓群が多く確認されている。

第2節 歴史的環境

宝達山は能登の最高峰で、その山麓は県下でも多様な考古学資料が分布することから、宝達志水町の南半を占める旧押水町域での考古学研究は古い。1890年代には北陸人類学会の会員を中心に遺物の採集活動が始められ、その成果は『北陸人類学会雑誌』に発表されている。1930年代に入ると地元の秋田喜一、嵯峨井亮の両氏を中心とする石川考古学研究会のメンバーが、遺物採集や紹介、遺跡の踏査や発掘調査などを行い、その成果を学会誌に投稿することで、当地の考古学研究や調査を進展させた研究史がある。このため本節においては、本遺跡の調査成果に関する歴史的な環境を概説する。

本遺跡に近い洪積台地で発掘された竹生野遺跡、宿東山遺跡、宿向山遺跡では、後期旧石器の鋸歯縁石器、ナイフ形石器、石核などに加え、縄文時代の石鏃や石匙の出土も報告されているが、遺跡の盛期は竪穴建物や大型土坑が数多く構築された弥生時代後期～古墳時代前期である。さらに、本遺跡

の北方約300mに位置する宿トリゲヤマ遺跡では、弥生時代中期の土器が採集されていることから、竹生野地区においては、弥生時代中期の頃から集落の建物群を地盤が安定している丘陵地に建設し、水田などを相見川流域の低湿地や開析谷で営む弥生ムラの活動が知られている。

この集落の構造は、古墳時代へと受け継がれ宿東山の弥生ムラの跡地には、時代のシンボルとなる宿東山古墳群が造営される。古墳時代前期の墳墓群は、前方後方墳2基、前方後円墳1基、方墳3基、円墳5基の11基から構成され、そのうち東支群の2基が、押水バイパスの建設に際して調査されている。1号墳は能登でも最古級の前方後円墳で、全長22mの小規模な墳丘からは、祭祀に関係した壺や高杯などの土器群が出土し、箱形の木棺内は、中国製の「方格規矩四神鏡」1面が副葬されていた。また、2号墳は直径13mの円墳で、周囲には墳丘の無い木棺墓や土坑墓もみられたことから、竹生野地区を活動の拠点に成長した地域集団の葬地とみられている。

古墳時代の中期、古墳の築造は宝達川北岸の丘陵地へも拡大する。河原三つ子塚古墳群は、標高約100mの丘陵上に所在する10基の円墳群から成り、中央部に位置する3基の大型円墳は最大径39mを測り、葺石や円筒埴輪を備えていることが知られている。

古墳時代後期になると竹生野地内に宝達山麓で最大級の前方後円墳が築造される。本遺跡の東約180mの竹生野神明社境内に位置する竹生野天皇山古墳群は、1号墳が全長57mを測る前方後円墳で、2・3号墳は直径10～15mの円墳である。明治の末年頃にヒスイの管玉、金環、須恵器などが出土したと伝えられる。この竹生野地区に定型化した大型墳が構築された背景には、やはり当地に権力基盤を置いた有力首長が、ヤマトの王権と結び付いた権力の象徴として築造したものであろう。

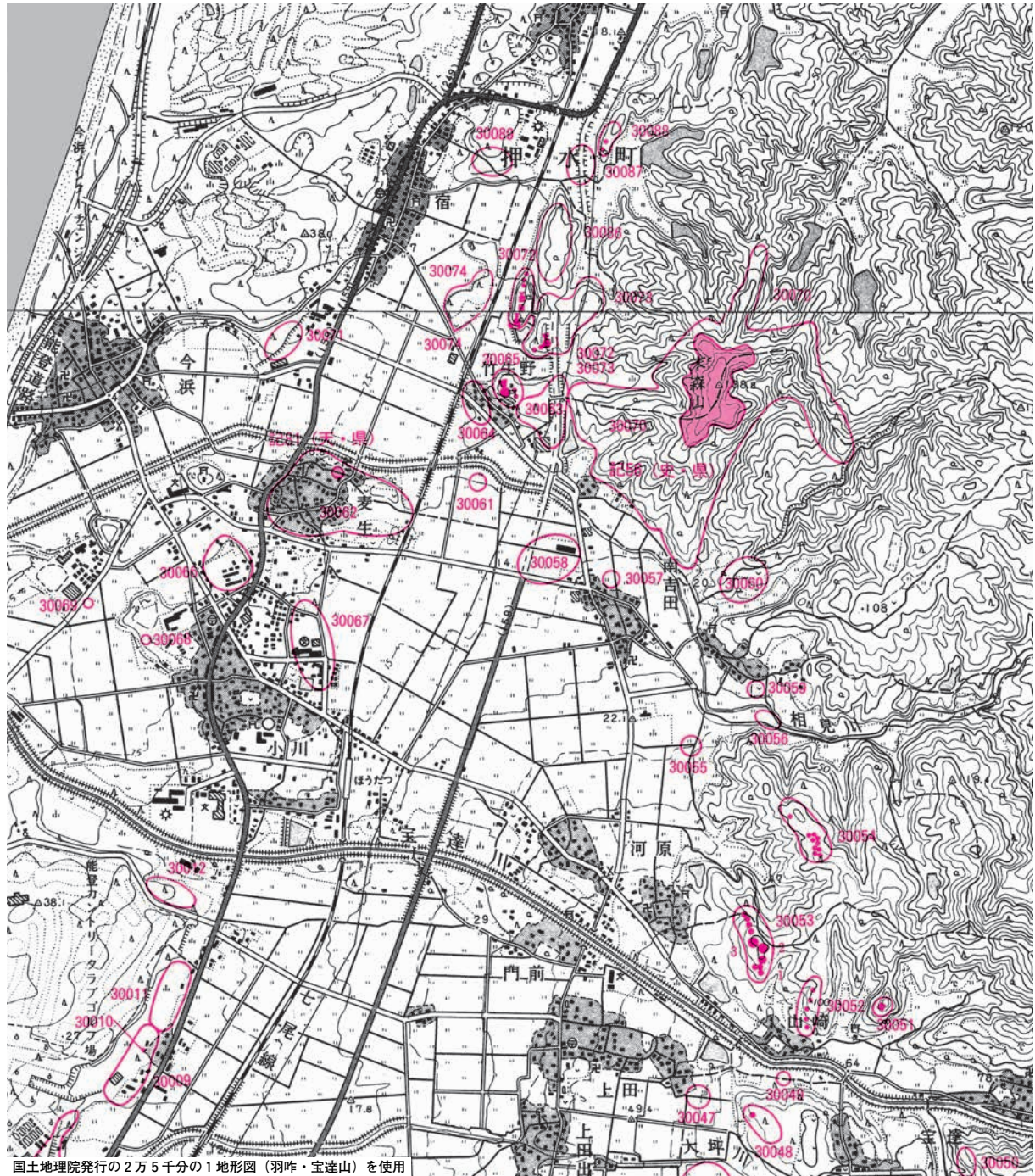
古代において宝達山の南西山麓は、窯業生産の拠点として稼働する地域であった。当地で須恵器の生産が開始されるのは、古墳時代後期末で前田川流域の紺屋町ムカイノ窯跡の操業からで、7世紀中頃の出来事と考えられる。その後は約300年間にわたり、前田川や大海川の丘陵地では須恵器や土師器の生活容器や仏具などが焼かれ、本遺跡や北川尻ホシバヤマ遺跡の古代集落をはじめとして、金沢平野の集落にも数多くの製品が運ばれている。

奈良時代、律令制が整備されるなかで能登の帰属は変遷したが、天平宝字元年（757）には立国し、国府は能登郡（現在の七尾市）に置かれた。当地を含む宝達山麓は、羽咋郡下の大海郷に含まれたとみられ、北川尻ホシバヤマ遺跡では当時（8世紀前葉～中葉）の集落が調査されている。内列砂丘に営まれた集落は、カマドを備えた竪穴建物や掘立柱建物が30棟も検出され、建物の内部からは和同開珎や墨書土器に加えて、役人が携行した帯金具なども出土したことから、住人には古代の大海郷の管理にも関与した郷長などが存在したとみられている。

平安時代の宝達山麓は、窯業生産とそれに関係した工人集落に加えて、宗教者が一時的に活動した遺跡がみられる。本遺跡からも焼成が不良な須恵器製品が出土しており、竹生野の丘陵地でも須恵器生産が行われた可能性を示唆している。また、宿向山遺跡の通称「テラヤシキ」一角からは、小規模な建物跡と9世紀後半～10世紀前葉の遺物が確認された。須恵器には宗教容器である多口瓶や鉄鉢、灰釉の手付小瓶もみられることから、仏教徒が一時的に活動した山間寺院と考えられている。

中世の資料に関しては、末森城跡の大手口と若宮丸の調査に加えて、城下町を比定している南吉田イヨヤシキ遺跡の成果が報告されている。陶磁器の年代は15世紀後半～17世紀代と戦国期を中心としながらも纏まりが弱く、本遺跡の14世紀後半～15世紀中葉に合致する資料は未確認である。

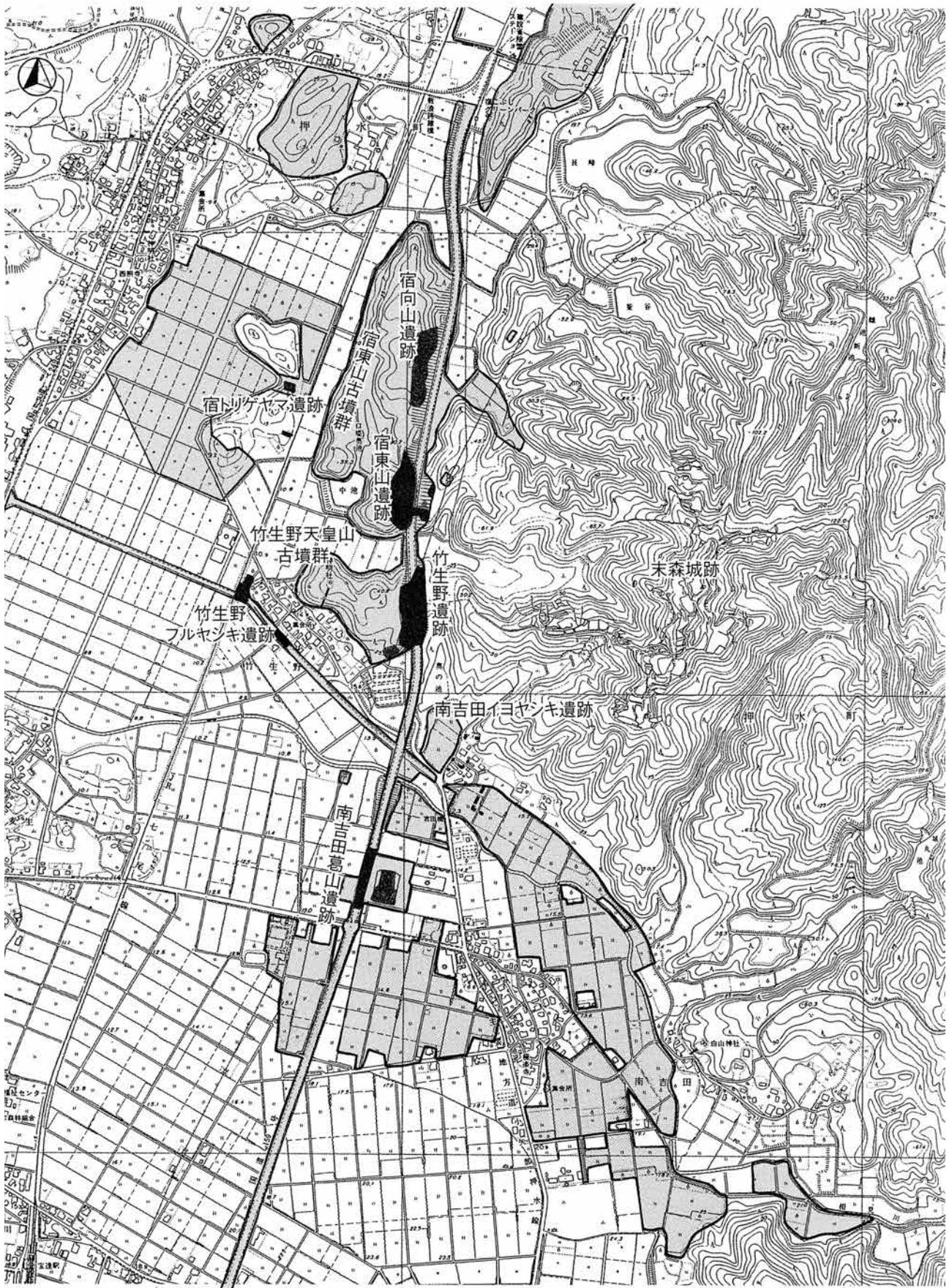
第2節 歴史的環境



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1/25,000）

第1表 遺跡地名表

遺跡番号	名称	種別	時代	遺跡番号	名称	種別	時代
30009	上田出西山遺跡	散布地	弥生～平安	30061	麦生かわだ遺跡	散布地	不詳
30010	米出ドタヤマ中世墓	墳墓	中世	30062	麦生遺跡	散布地	不詳
30011	堂田遺跡	散布地	奈良～平安	30063	竹生野遺跡	集落跡	旧石器～中世
30012	小川A遺跡	散布地	不詳	30064	竹生野フルヤシキ遺跡	集落跡	弥生～江戸
30047	上田地頭方遺跡	散布地	縄文	30065	竹生野天皇山古墳群	古墳	古墳
30048	上田狐塚古墳	古墳	古墳	30066	今浜新保山遺跡	散布地	縄文・奈良
30049	上田永畑遺跡	散布地	不詳	30067	今浜墓田山遺跡	散布地	奈良～平安
30050	宝達中上野遺跡	散布地	縄文	30068	今浜A遺跡	散布地	不詳
30051	山崎中世墳墓	墳墓	中世	30069	今浜B遺跡	散布地	不詳
30052	山崎横穴群	横穴墓	古墳	30070	末森城跡	城跡	中世
30053	河原三つ子塚古墳群	古墳	古墳	30071	麦生A遺跡	散布地	不詳
30054	南吉田向山中世墓群	墳墓	中世	30072	宿東山古墳群	古墳	古墳
30055	南吉田堂の後遺跡	散布地	古墳	30073	宿東山遺跡	集落跡	旧石器～奈良
30056	南吉田堂の庭遺跡	散布地	古墳	30074	宿トリゲヤマ遺跡	散布地	弥生～中世
30057	南吉田穴田遺跡	散布地	不詳	30086	宿向山遺跡	集落跡・砦跡	旧石器～中世
30058	南吉田葛山遺跡	散布地	古墳～中世	30087	宿エゾエ遺跡	散布地	奈良・平安
30059	南吉田古屋敷遺跡	散布地	不詳	30088	宿エゾエ山中世墳墓群	墳墓	中世
30060	南吉田サンマイ遺跡	散布地	平安・中世	30089	宿ホシバ山遺跡	散布地	奈良



第3図 竹生野地区周辺の調査箇所 (1/12,000)

第3章 遺構と遺物

第1節 概要

調査区はJR七尾線の線路と丘陵裾部を囲む町道に挟まれた水田に位置する。調査地は、新設の道路線形がカーブする箇所位置するが、JR七尾線の西側までは線路に直行する形で線形が続いており、センターライン杭が線路手前に設置されていたため、そのラインを基準として調査区に延長し、任意の10mグリッドを組んで基準杭を打設した。杭番号は南西―北東方向を南西から順にA～E、北西―南東方向を北西から順に1～5とし、南西隅の杭を以って10mグリッドを「A1区」のように呼称した。

地形は末森山を頂点として放射状に落ちており、調査区内では東から西へ、また、北から南へ向け低くなっている。基本の堆積土層は耕作土→床土→灰褐色砂質土の包含層であり、地山土は調査区西半部が砂質土、東半部が粘質土であった。遺構は土坑が11基、溝が5条、ピットが約50基、室状遺構、大型の落ち込み3箇所等が検出された。溝はいずれも調査区東側の丘陵方向から続くものであり、地形的に低い方向へ走ることから山裾から流れ出る水の流路等であろう。溝からは古墳時代から古代を中心とする遺物が多く出土した。ピットは丘陵裾に近い安定した地盤に多くが掘削されており、柱根の遺存したものも確認しているが、掘立柱建物を復元するまでには至っていない。土坑や室状遺構からは中世から近世の遺物が主に出土した。

その他、明確な遺構としては捉えられなかったが、B2・3区で灰色粘土が溝状に堆積した状況を確認した。また、1号溝以南のA3・4区では遺構検出面を覆った灰色砂層の包含層を検出しており、「流土層」として遺物を取り上げた。

第2節 遺構

1. 土坑等

1号土坑（第5図）

A1・2区で検出した。径約250cm、深さ70cmの円形土坑である。西壁の一部は三日月状の浅いテラスを形成している。上層位で礫群が検出され、礫層中から近世陶磁器や石製品が出土した。最終的に埋没したのは出土遺物の年代から19世紀以降である。

2号土坑

B1・2区で検出した。径95cm、深さ12cmの円形土坑である。1号土坑と同様に覆土中に礫群が検出され、坑底から結桶底とみられる板が出土した。結桶を埋めた肥溜め等の性格が推測される。出土遺物の年代や、覆土の類似からすると1号土坑と大差ない時期に埋没した可能性が高い。

3号土坑（第5図）

B2区で検出した。北部を4号土坑に切られている。205×245cmの楕円形を呈し、深さは約40cmを測る。覆土は淡茶褐色砂層である。南西部に幅47cm、長さ175cm、深さ20cmの溝が直線的に取り付いており、切り合い関係は認められなかったため同時期に機能していた可能性がある。遺物が出土していないため時期は不明ながら、室状遺構に近い時代の遺構である可能性が高い。

4号土坑（第5図）

B2区で検出した。165×195cmの楕円形を呈し、深さは約50cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土層である。3号土坑より新しい。出土遺物から埋没は18世紀末以降であろう。

5号土坑（第6図）

B3区で検出した。125×145cmの略円形を呈し、深さは45cmを測る。4号溝を切っている。坑内からは石や下駄、板片等が出土した。結桶等は検出されていないが、後述する6号土坑は本遺構の造り替えの可能性がある、肥溜めか便所跡と推定される。ただし、径などがかなり異なることからすると、同一機能を有する遺構の造り替えというよりは、同時期に機能した大小使用の穴などであることも想定できよう。出土遺物から17世紀以降の遺構と判断される。

6号土坑（第6図）

B3区で検出した。径107cmの円形を呈し、深さは38cmを測る。坑底から8cmほど浮いた位置で径約100cmの結桶底と見られる底板が出土し、壁面に沿って上下二段の箍が検出された。樽板は出土していないことから抜き取られたとみられる。底のある結桶が埋め込まれていることから、肥溜めか便所跡と推定される。7号土坑より新しい。

7号土坑（第6図）

B3・4区で検出した。235×190cm以上の隅丸長方形を呈する土坑と推定されるが、東部が調査区外に延びるため全形は不明である。深さは35cmを測り、西側を6号土坑に切られる。第5層から珠洲焼の片口鉢が出土した。出土遺物と堆積土から15世紀以降の堪水用の遺構と推定される。

8号土坑（第5図）

町道拡幅部分のD2区で検出した。143×125cm以上の円形土坑で、深さは54cmを測る。東部は調査区外に続いているが、20～30cm程度の延びで収束すると推測される。覆土は不明。遺物は出土していないが、8～10号土坑は密接して掘削されていることから同時期と推定する。

9号土坑（第5図）

町道拡幅部分のD・E2区で検出した。123×67cm以上の円形土坑とみられるが、東部は調査区外に続いており、全形は不明である。深さは52cmを測る。西側は一部段掘りになっている。覆土は不明。8～10号土坑は密接して掘削されていることから同時期と推定する。

10号土坑（第5図）

町道拡幅部分のE2区の調査区北端部で検出した。北・東方共に調査区外へ延びていることから全形は窺い知れない。深さは15cm前後と浅い。覆土は不明。出土遺物から18世紀後半以降の遺構と判断される。

室状遺構（第7図）

B・C2区で検出した。長軸375cm、短軸360cm以上の不整形な大型土坑で、北側の一部が調査区外に延びる。検出段階では切り合い等を確認できなかったが、長方形土坑2基、円形土坑1基が重複したような形状から、3基の遺構が切り合っているものとみられる。形態等から室状遺構と呼称した。室2と室1・3との先後関係は不明であるが、室1・3に関しては2～6層は室3に、7・8層は室1に対応するとの調査所見があるため、室1が古い遺構と理解される。室3の北壁に小テラスがあり、標高値が室2の底面に近似することから室2の底面の北端部と推定され、それから底面の長さを復元すると約280cmとなる。なお、室2は他2基に比べても浅く、深さが20～35cmであることから室へ降りるための階段状の施設であったことも想定し得る。出土遺物から17世紀代の遺構であろう。

ピット (第9図)

約50基のピットを検出しているが、柱穴となる可能性が高いものは主にB・C3区で検出した。特に2号溝と重複して検出されたものが多いが、土層断面図にかかったもの以外の先後関係は不明である。ピット1・4からは柱根が、ピット3からは珠洲焼が出土した。

2. 溝

1号溝 (第8図)

B4区からA3区にかけて東西方向に走る延長15.2mを検出した。幅は75～135cmで、西側に向けて幅を増加させている。深さは5～30cmを測り、底面は東から西に向けて降下している。15.2mで約25cm標高が下がる急傾斜であり、その方向からしても地山土の等高線に直行していたと判断される。西端部では南北に幅50cm前後、長さ280cm・490cmの溝が方向を同じくして存在する。本遺構の覆土が砂礫層単層であり、その状況からして一定量の水流通った溝であることが窺われることから、下流となる西側で幾度か流路が南北に振れた痕跡とみられる。出土遺物から14～15世紀以降の用水関係の遺構であろう。

2号溝 (第9図)

C3区からA3・4区にかけて蛇行する溝で、A3区で5号溝に切られているとみられる。また、3号溝を切っている。A4区での旧流路は遺存していないが、おそらく5号溝と同様の線形を描いて調査区南部に位置する落ち込みへ連結していたものであろう。北東部では南部がテラス状に張り出して310cmの幅を有するが、南へ進むにつれ幅を減じ、1号溝以南では幅30cm前後にまで狭まる。深さは約10～20cmを測る。底面は南側にやや降下してはいるが、北端部と南端部とでは高低差が10cmに満たない。覆土には砂質土と粘土が観察されることから、一時的な水流を想定できる。須恵器を主体とする多くの遺物が出土しているが、溝底からはかなり浮いた状態であることから、大半は埋没過程での流れ込みと理解される。3号溝との切り合い関係から、埋没は9世紀前半以降とみられる。

3号溝 (第6図)

B3区からA3区にかけて検出した湾曲する溝で、2号溝と同じくA4区の落ち込みへ連結する。幅は95～170cm、深さは20cm弱を測る。B3区南東部で2号溝に切られている。覆土には砂質土と粘土が観察されることから一時的な水流を想定できよう。本遺構から出土した遺物も2号溝と同様に底面からは大きく浮いた状態であった。埋没は9世紀前半頃であろうか。

4号溝 (第6図)

B3区で検出した湾曲する溝で、南部は5号土坑に切られて一旦途切れるものの、3号溝の東肩でテラス状に痕跡が検出されている。おそらく3号溝に切られているものと思われ、本来はA4区の落ち込みに続いていたのであろう。幅は90～140cm、深さは5～10cmと浅い。底面は若干南側へ降下しているようだが、その比高は明確には捉えられない程度である。覆土の4・5層は平面図では表記されないが、別遺構とみられる。本遺構から出土した遺物も2・3号溝と同様に底面からは浮いていた。埋没は8世紀後半頃であろうか。

5号溝 (第10図)

D2・3区からA3区にかけて検出した溝で、D2・3区からB3区北端までは直線的に走り、一旦途切れた後、B3区南端からA3区にかけてはやや湾曲してA4区の落ち込みに接続する。A3・4区の境目で2号溝に切られているかのような遺構表記になっているが、出土遺物等からみて2号溝よりは新しいと判断される。幅は50～80cm、深さは11～30cmを測る。覆土の3～6層は別遺構であ

る。第18図94の須恵器がほぼ底面から出土していることから、9世紀前半には機能していたとみられ、完全に埋没するのは10世紀前半頃であろう。

その他

遺構としては確認できなかったが、B 2・3区で溝状に堆積した灰色粘土層を検出した。出土遺物の大半は須恵器であるが、珠洲焼等他遺構に比較すると多く含んでいる。最も新しい遺物から判断すると、堆積は17世紀以降と推定される。また、A 3・4区の1号溝以南では旧地形が低くなっており、遺構検出面上層に灰色砂層の包含層の堆積を確認し、流土と認識した。出土遺物の大半は古代以降であるが、中世の製品も少量含まれており、堆積は中世以降の可能性がある。

第3節 遺物

土坑等出土遺物（第11～13図）

土坑出土遺物として1～6、9～13を図示した。1～3、12、13は1号土坑上層から出土した遺物である。1、2は共に肥前系磁器碗で、それぞれ19世紀前半、18世紀中葉～後葉の製品である。3の碗はシャープな作りの高台が肥前系陶器の京焼風陶器に類する。釉調は打ち刷毛目に類しており刷毛目唐津に似ているが、刷毛目唐津とするには器形的に違和感がある。1号土坑からはよく似た高台を持つ製品が他に2個体出土しており、その胎土は瀬戸製品と判断されることから、3も含めて瀬戸の刷毛目製品としておきたい。時期は18世紀後半頃か。12の上臼には挽き木の挿入孔が対角線上に2箇所ある。一方は擦り面まで到達しているため使用により孔が抜けてしまったとみられ、その後反対側に彫り直したと推定するが、奥行きが2.2cmで挽き木の挿入孔としてはやや浅いようにも思われ、摩擦痕も観察されない。12、13は径、擦り面のカーブが合致しており、分画等も類似することからセットで使用され、同時に廃棄されたものである。4は2号土坑出土で、被熱のため釉が白濁しているが、白化粧の痕跡が観察されることから3と同じ刷毛目製品であろう。5、6は4号土坑から出土した。5は瀬戸・美濃のひだ皿である。高台端部以外に透明度が高い淡緑色の灰釉が薄く掛けられており、その釉調から御深井釉の可能性もある。5号土坑からは図示した9の他に下駄や近世の鉄釉碗等が出土している。10、11は7号土坑出土である。10は内面に蓮弁文を持つ大振りの青磁盤の底部片である。11は珠洲焼の片口鉢で、殆ど卸し目が残らないほどに使い込まれている。

7、8は4号土坑の西側で除去した整地土層からの出土であり、土坑出土遺物ではない。

14～16は室状遺構の中層から出土した。14は大型の土師器皿で、内面には明瞭なナデ痕が、外面下半には指頭圧痕が観察される。土師器皿は図示した以外にも下層から平底で浅く開く大皿が1点出土している。近世以降の製品とみられる。15、16は珠洲焼で、16は甕であるが内面が磨耗していることから鉢に転用されたのであろう。

溝出土遺物（第13～18図）

溝出土遺物として17～95を図示した。17～20は1号溝出土で、17と18の須恵器は混入である。

21～70は2号溝出土である。21～29は須恵器杯蓋で、21、22がⅡ₁期、29がⅡ₂期、23、24がⅡ₂～Ⅱ₃期、25がⅡ₃～Ⅲ期、26がⅢ～Ⅳ₁期の製品である。29は須恵器蓋と高杯の溶着資料である。蓋の口縁端部は高杯脚端部を包むように反り上がっており、口縁端部と脚端部との隙間に溜まった自然釉によって溶着している。蓋の口縁端部は全て打ち欠いており、溶着したまま高杯として使用したものであろうか。蓋の天井部外面には降灰の痕跡が観察されることから、重ね焼いたとみるよりは、焼き台として利用されたと考えた方が妥当である。30～44は須恵器無台杯で、31がⅡ₁期、30、34～36、

41がⅡ₂期、37、39、40、42、43がⅣ₂期の製品である。32、33は橙色を呈し、土師器質であるが、回転ヘラ切り痕が観察されることから須恵器の生焼け製品と判断される。34は口縁部に溶着痕があり、外側面から外底部にかけて自然釉が掛かっていることから、合わせ口の状態で焼成された資料とみられる。43の外底部には漆が付着している。30、31、34、41、43、44は器形に歪みが生じているが、中でも44は大きく歪んでいる。45～49は須恵器有台杯で、45、46がⅡ₂期、47がⅡ₂～Ⅱ₃期、49がⅢ期の製品である。50～53は須恵器、54～56は土師器の高杯である。57～60、68は須恵器瓶類である。58はⅡ期の長頸瓶で、口縁部はC3区、胴部はB3区を中心に小片となって出土した。胴部下半はほぼ完形に復元されたにもかかわらず、底部片は1点もないことから、底部は別の場所にて打ち抜かれていた可能性が高い。胴部下半はタタキ調整の後にケズリを施しているが、タタキ痕がきれいに消されず残っている。また、頸部には二段の沈線が上下に巡るが、いずれも上方の沈線が一周せず一部途切れている。59は7世紀の長頸瓶で、頸部以下は完形である。胴部下半から外底部にかけてケズリ調整が施されており、ほぼその範囲と一致する箇所、焼成時のひび割れが無数に生じている。肩部全面と内底面中央部には降灰がみられる。68は口縁部、胴部、側底部片を図上復元した大型の横瓶である。細かいタタキ調整が施されている。66は土師器質の土馬頭部である。棒状の粘土塊を握って整形したもので、喉部には粘土塊を曲げた際に生じた横皺が残っている。背部をやや薄くつまみ出してたてがみとし、目鼻は刺突による孔で表現している。口の奥には爪痕跡のようなやや湾曲した細沈線が残ることから、爪を立てながら口を整形したのではないかと推定される。頸部以下は割れているが、割れ口近くの喉側に2箇所の剥離痕が観察されるため、前足が貼り付けられていたと判断される。胴部がないため裸馬か否かは不明である。2号溝出土遺物として取り上げられているが、出土層位は遺構検出面よりも高いことから包含層出土と見たほうがよい。そのため、確かな時期は分からないが、本遺跡出土遺物の中心時期である7世紀後半～9世紀初頭の可能性が最も高いとみておきたい。67、69、70は須恵器の甕である。67は細片となって2号溝以外からも広範囲で出土した。時期は8世紀である。

71～82は3号溝出土遺物の須恵器である。71は杯身、72～74は蓋で、71はⅠ₁～Ⅰ₂期、72、73はⅡ₁期の製品である。72は図化していないが、外面中央部に径1.5cmのつまみ剥離痕が観察される。75～77は無台杯で、75はⅣ₂期、76はⅣ₂(新)～Ⅴ₁期の製品である。77は大きく歪んでおり、口縁部外面から外底面の一部に降灰がみられる。78～80は有台杯で、78はⅡ₂～Ⅱ₃期の製品である。82は高杯で、非常に薄手の作りであり、脚部の絞り目が器表面にも明瞭に観察される。

83～90は4号溝出土遺物で、87以外は須恵器である。88は溝底近くから出土した。有台杯と甕の可能性が高い製品の溶着資料である。杯胴部の破断面と甕外面の間には釉溜りが生じていることから、杯は焼き台として利用されたものと判断される。90は浮文を持つ甕で、出土破片から浮文は4箇所に添付されていたと推定できる。

91～95は5号溝出土の須恵器である。93、94は無台杯で、94はⅣ₂(新)期、93はⅥ₂期、92は有台杯でⅣ期、95は鉄鉢でⅣ₁～Ⅳ₂(古)期の製品である。94はほぼ溝底部から出土した。93は古代としては本遺跡では最も新しい時期の遺物で、壁面落ち際からの出土であるため最終埋没年代を示している可能性がある。他にも同時期の遺物が数点出土している。

その他出土遺物 (第19、20図)

96～123を図示した。96～107はB2・3区で溝状に検出された灰色粘土層出土遺物である。106は青磁盤で、出土破片は無文である。図示しなかった遺物には17世紀代の肥前系陶器が少量含まれる。

108～115、117～123はA3・4区に堆積していた流土とみられる灰色砂層出土遺物、116は包含層出土遺物で、全て須恵器である。108、109は杯蓋で、それぞれ時期はⅡ₁期、Ⅱ₂～Ⅱ₃期である。

110～113は有台杯で、111がⅡ₂～Ⅱ₃期、110がⅤ₁～Ⅴ₂期、113がⅥ₁～Ⅵ₂期の製品である。115～117は無台杯で、115がⅣ₂期、116がⅣ₂～Ⅴ₁期、117がⅣ₁～Ⅳ₂(古)期の製品である。117は、外底部に「田次女」と判読できる墨書がある。他にも同一層から「田□□」、及び「□女」と読める墨書を持つ須恵器無台杯2点が出土しており、同じ人名を墨書したものと想定される。114は瓶類の底部とみられる破片で、外底部に大きな砂塊が溶着している。一部内面や破断面にも砂が確認され、別の破断面には薄く降灰が観察されることから焼き台として利用されたものと推定される。

第4節 小 結

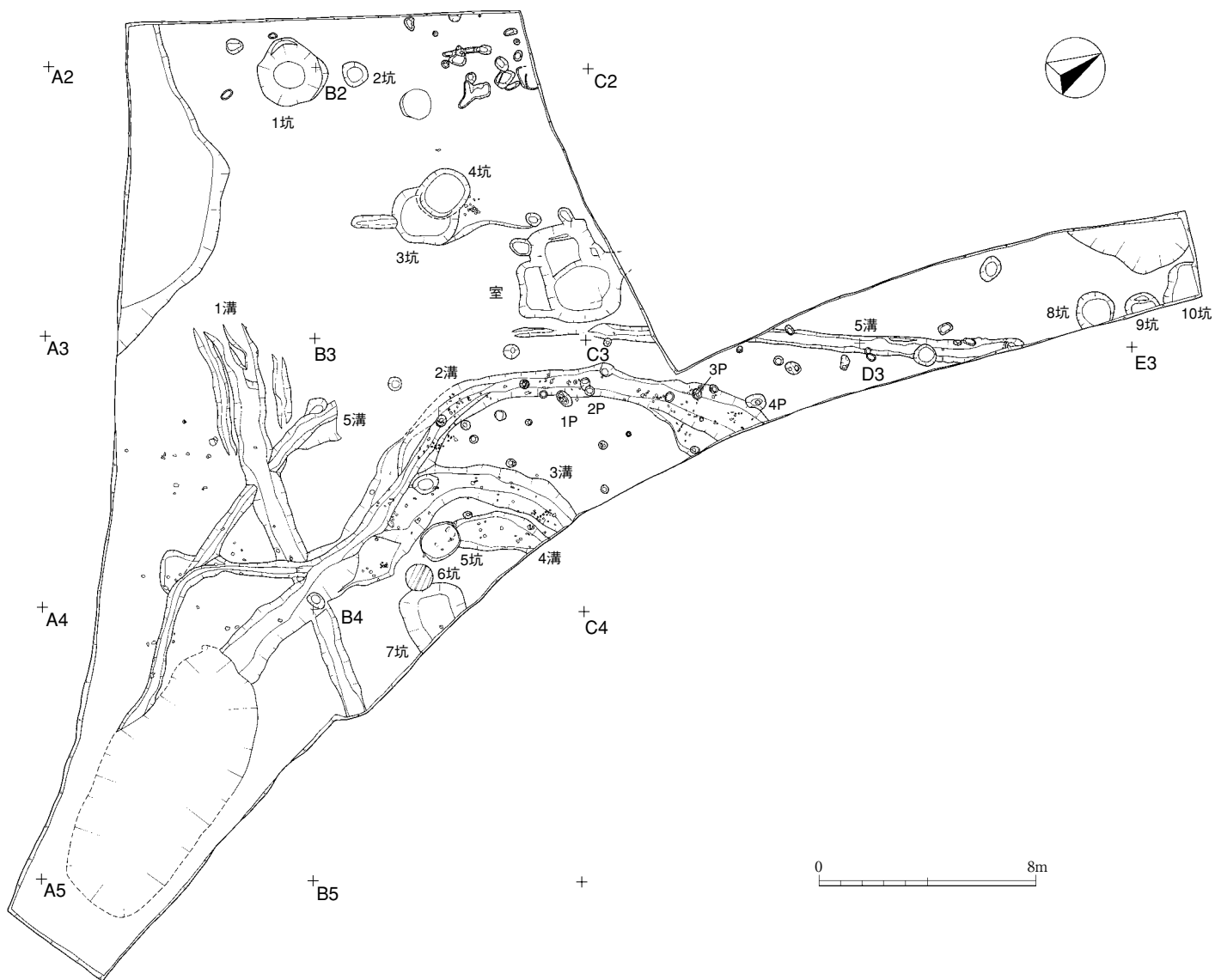
本遺跡の遺構は、大きくは古墳時代から古代までと中世以降に大別できる。

古墳時代から古代までの遺構としては2～5号溝が挙げられる。これらは、旧地形の等高線に並走するような線形をとり、A4区の水溜状の落ち込みに接続することで共通する。その中では5号溝が最も新しいことは、出土した須恵器から明らかで、直線的であることから自然流路的な特徴を有する2～4号溝を整備したと取れる点でも新しいとの判断は妥当であろう。他の溝の新旧関係は切り合いや出土遺物から、4号溝→3号溝→2号溝の順に掘削されたとの見方が可能で、時代が降るにつれ北側、及び西側に移動していった様子が伺われる。溝の東側に住居等の建物が設営されていたとすると、居住空間をより広く確保するために最終段階で最も西側に5号溝を掘削したともとれる。当該期の出土遺物については、溝から出土した遺物が底面から浮いているものが多く時期も混在していることから、その多くが溝の東側斜面からの流れ込みによる二次堆積遺物ではないかと考える。ただし、仮に二次堆積としても破断面の磨耗度は高くなく、移動距離は短いと思われる。

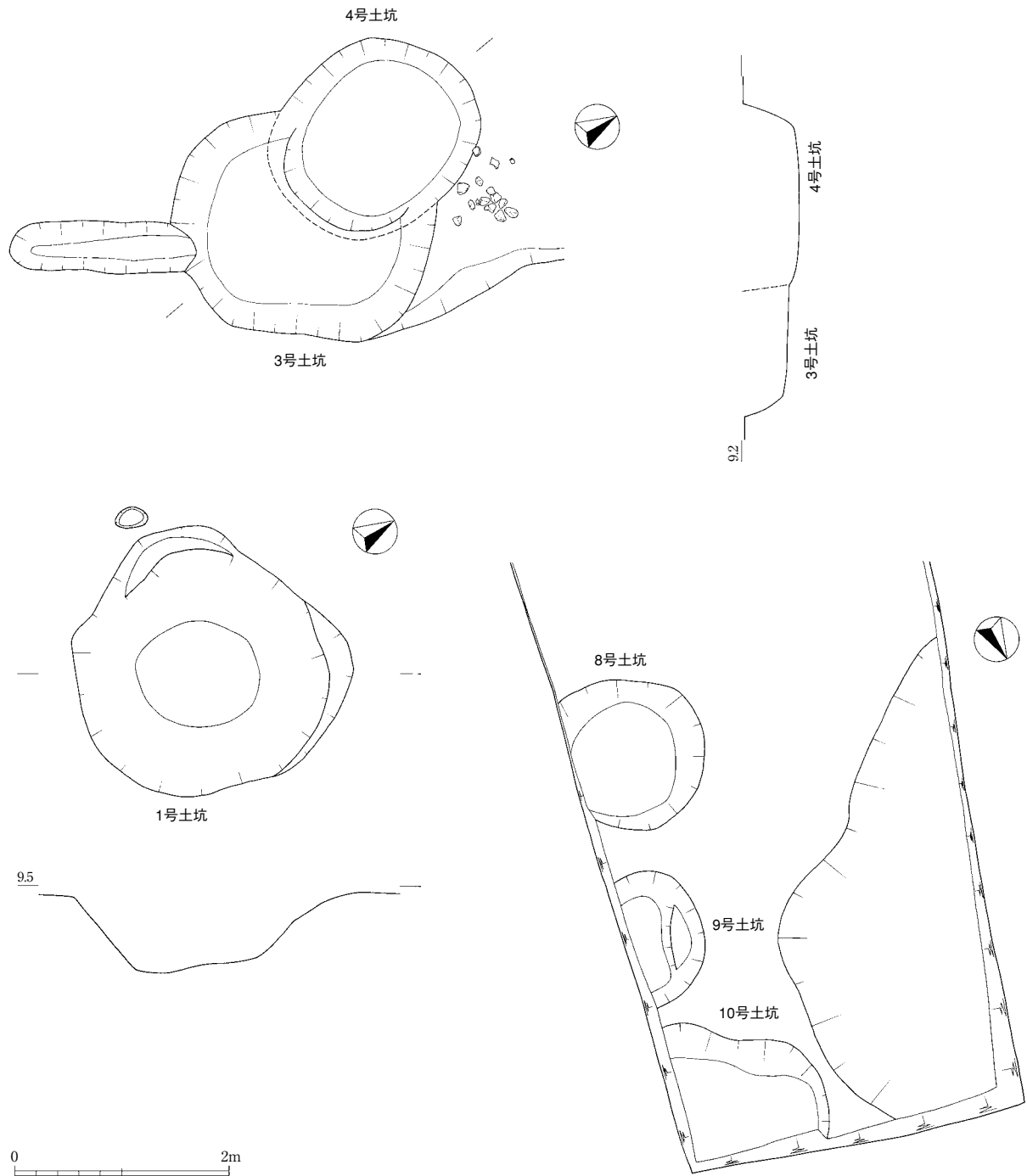
出土遺物の大半を占める須恵器は古代土器編年Ⅰ₁～Ⅵ₂期の製品を確認しているが、中でもⅡ～Ⅳ期を中心とする。須恵器の中には溶着したものや大きく焼き歪んだものが多く含まれている。通常の集落においても溶着した製品が出土することは間々あるため、それだけで判断するのは危険であるが、調査面積を考慮するとその出土比率は高いと思われる。集落背後の丘陵地で須恵器窯が操業していた可能性もあることから、調査区東側に存在したであろう集落に、須恵器の窯業生産に関係した人々が居住していた可能性を指摘しておきたい。

中世以降の遺構は1号溝、土坑、室状遺構等である。等高線に直交する1号溝は明らかに他の溝とは異なり、古代までにはない土坑等が中世以降に掘削されている事実からも中世以前と中世以降では土地利用が大きく変化したことが明らかである。ピットの帰属時期は不明ながら、ピット3から珠洲焼が出土していること、土層観察断面で確認できたものは全て2～5号溝より新しいことを考慮すると、大半はそれらの溝の埋没後に掘削された中世以降の建物痕跡ではないかと考える。調査区の制約もあろうが、1号溝以南に中世以降の遺構が確認されないことから、1号溝の北部が中世以降に居住地として利用された空間と判断される。

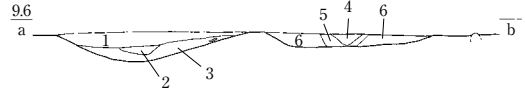
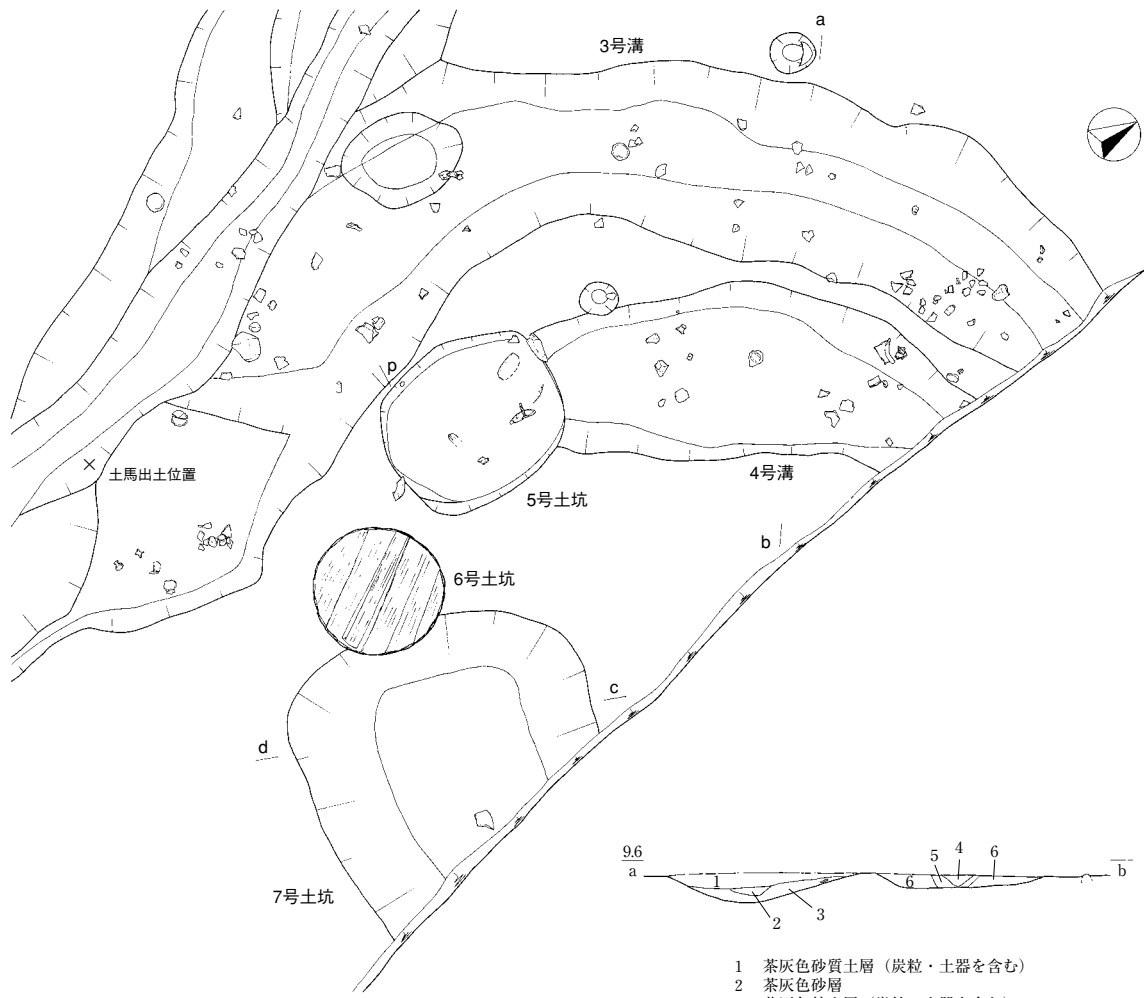
※古代遺構・遺物の時期は、田嶋明人の示した古代土器編年軸（北陸古代土器研究会・石川考古学研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988）に基づき記載した。なお、実年代については、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センターが2006年に発刊した『金沢市畝田東遺跡群Ⅳ』例言（北陸古代土器研究会『シンポジウム 古代の須恵器貯蔵具Ⅱ－貯蔵具の制作技術を復元する－』2000年を参考）に概ね準拠した。以下のとおりになる。
Ⅰ期（Ⅰ₁・Ⅰ₂）：7世紀初頭～中頃 Ⅱ期（Ⅱ₁～Ⅱ₃）：7世紀後半～8世紀初頭 Ⅲ期：8世紀第2四半期頃
Ⅳ期（Ⅳ₁・Ⅳ₂古・Ⅳ₂新）：8世紀中頃～9世紀初頭 Ⅴ期（Ⅴ₁・Ⅴ₂）：9世紀前半～9世紀第3四半期頃
Ⅵ期（Ⅵ₁～Ⅵ₃）：9世紀後葉～10世紀中葉前後 Ⅶ期（Ⅶ₁・Ⅶ₂古・Ⅶ₂新）：10世紀後葉～11世紀中葉前後



第4図 遺構配置図 (S=1/240)

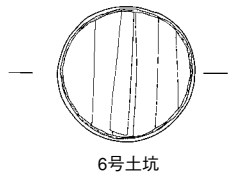


第5図 遺構実測図1 (S=1/60)

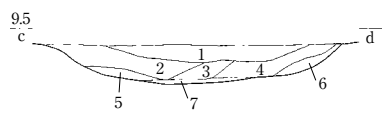
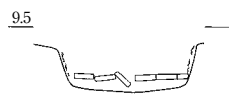


- 1 茶灰色砂質土層 (炭粒・土器を含む)
- 2 茶灰色砂層
- 3 黄灰色粘土層 (炭粒・土器を含む)
- 4 濁灰色砂質土層
- 5 淡黄灰色粘土層
- 6 茶灰色砂質土層 (炭粒・土器を含む)

3・4号溝



6号土坑

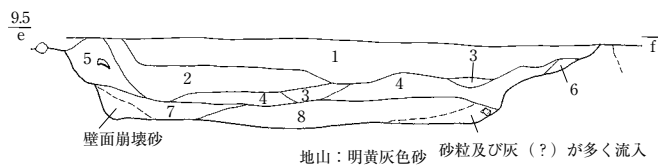
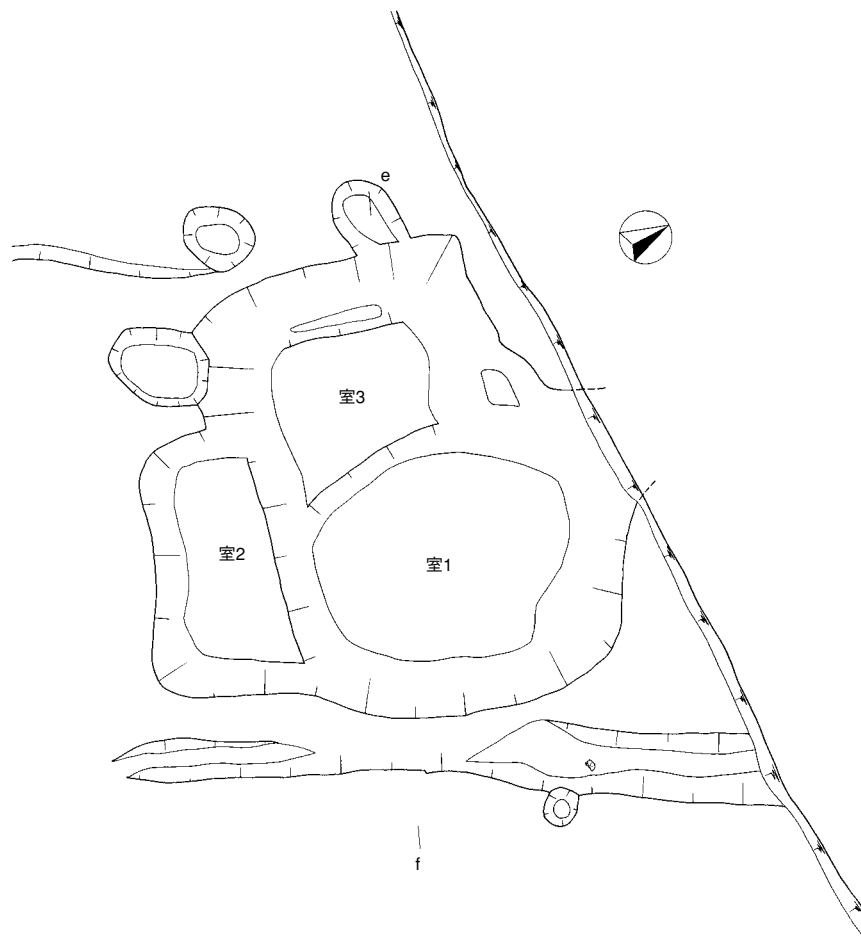


- 1 明灰色砂質土層 (やや粘質である)
- 2 明灰色砂層
- 3 濁灰色砂質土層 (炭化物を含む)
- 4 オリーブ灰色粘土層
- 5 混砂オリーブ灰色粘土層 (珠洲焼の片口鉢が出土)
- 6 不明
- 7 砂礫層

7号土坑



第6図 遺構実測図2 (S=1/60)

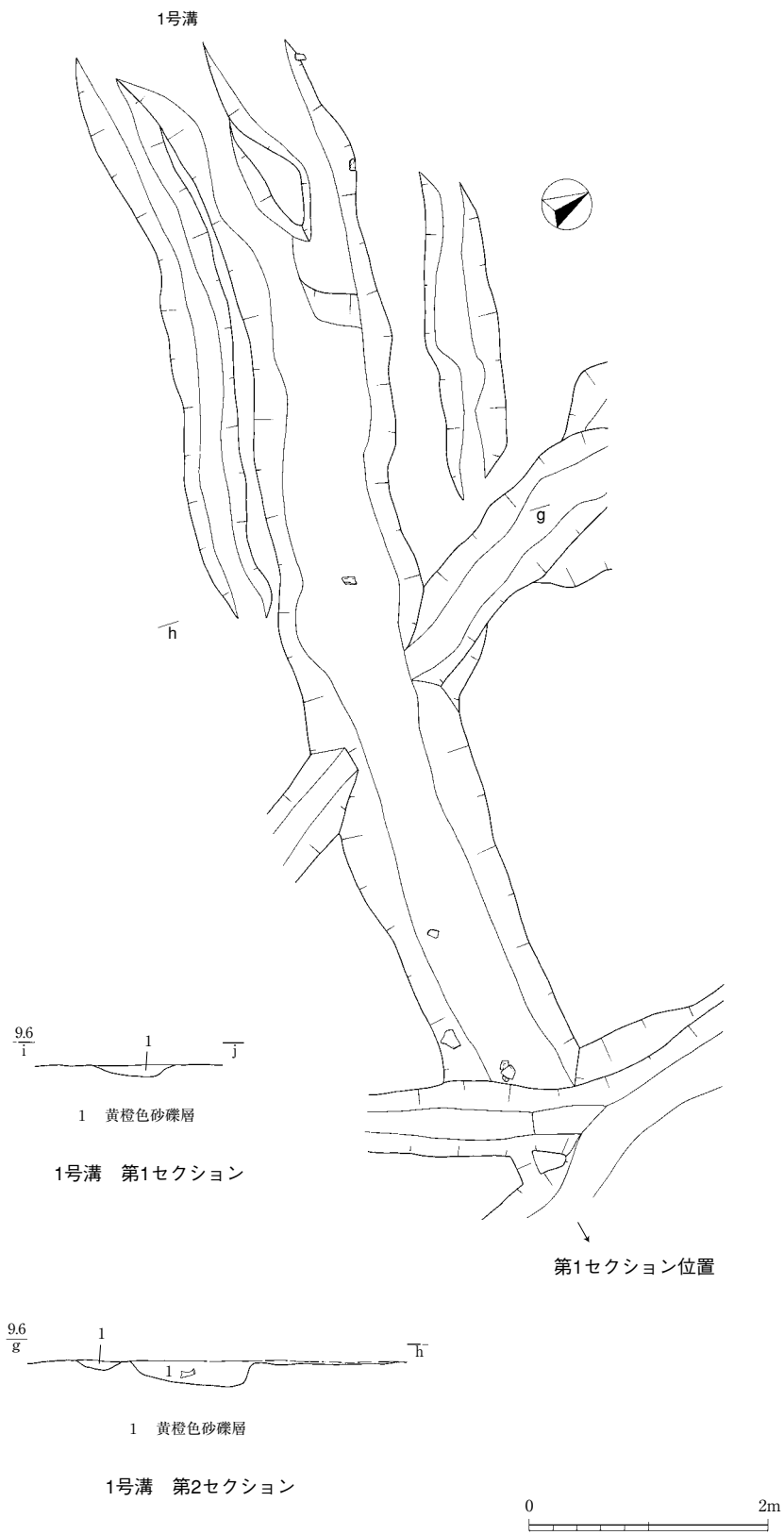


- | | | |
|----|---|-------------------------------|
| 上層 | 1 | 濁灰褐色砂質土層 |
| 中層 | 2 | 黄灰色砂質土層 |
| | 3 | 濁黄褐色砂礫層 |
| | 4 | 灰褐色砂層 (上面に礫の混入が多い) |
| | 5 | 暗灰白色砂層 |
| | 6 | 暗灰褐色砂層 (炭化物の混入あり) |
| 下層 | 7 | 明灰色砂質土層 |
| | 8 | 濁灰色砂質土層 (下面に炭化物と多量の粘土ブロックを含む) |

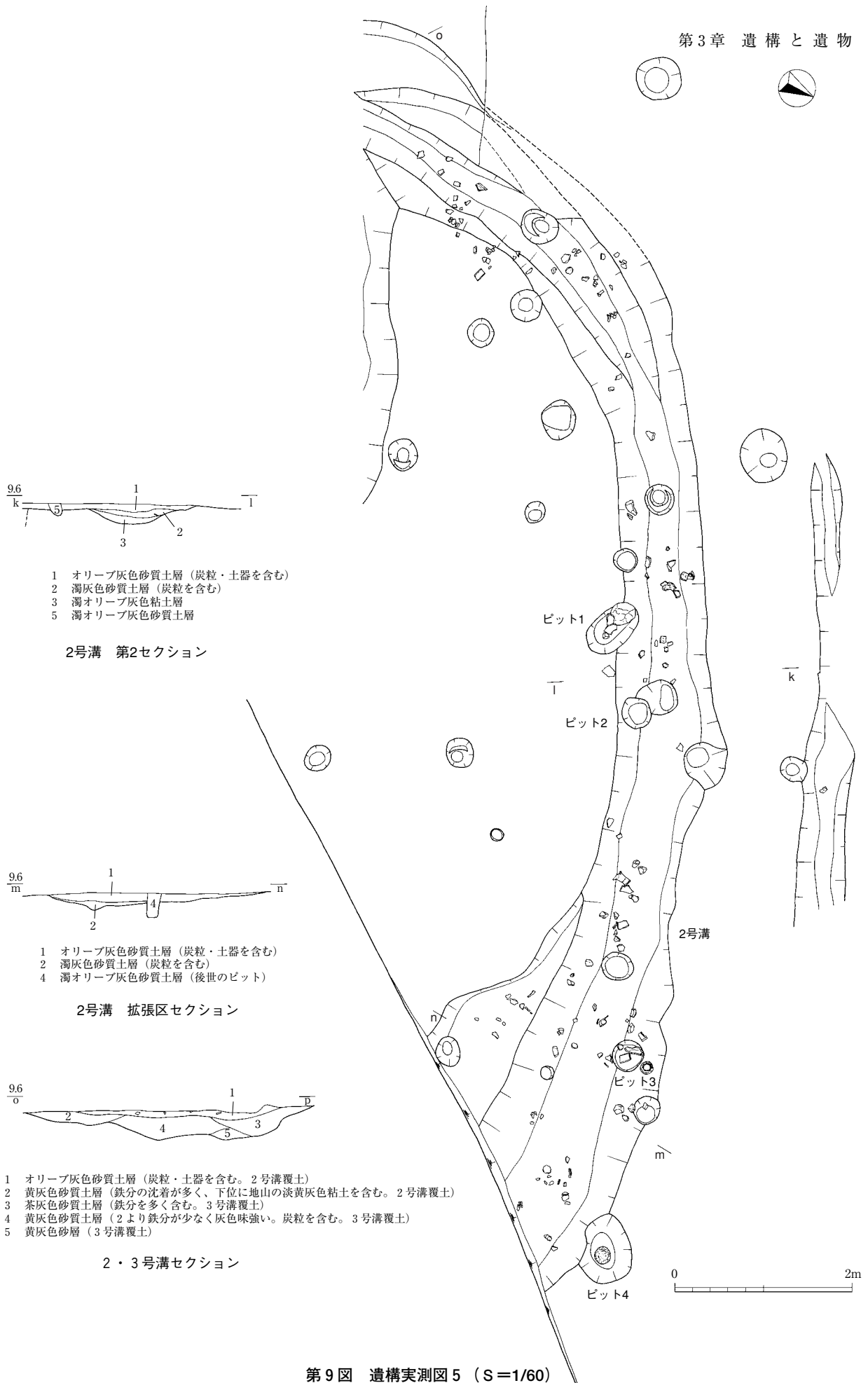
室状遺構



第7図 遺構実測図3 (S=1/60)



第8図 遺構実測図4 (S=1/60)



- 1 オリーブ灰色砂質土層 (炭粒・土器を含む)
- 2 濁灰色砂質土層 (炭粒を含む)
- 3 濁オリーブ灰色粘土層
- 5 濁オリーブ灰色砂質土層

2号溝 第2セクション

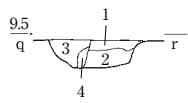
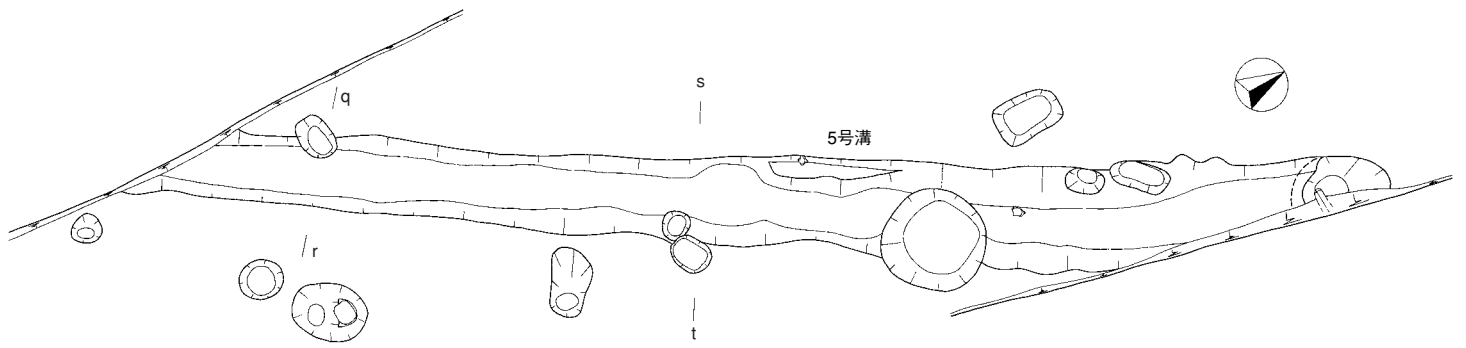
- 1 オリーブ灰色砂質土層 (炭粒・土器を含む)
- 2 濁灰色砂質土層 (炭粒を含む)
- 4 濁オリーブ灰色砂質土層 (後世のピット)

2号溝 拡張区セクション

- 1 オリーブ灰色砂質土層 (炭粒・土器を含む。2号溝覆土)
- 2 黄灰色砂質土層 (鉄分の沈着が多く、下位に地山の淡黄灰色粘土を含む。2号溝覆土)
- 3 茶灰色砂質土層 (鉄分を多く含む。3号溝覆土)
- 4 黄灰色砂質土層 (2より鉄分が少なく灰色味強い。炭粒を含む。3号溝覆土)
- 5 黄灰色砂層 (3号溝覆土)

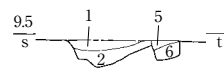
2・3号溝セクション

第9図 遺構実測図5 (S=1/60)



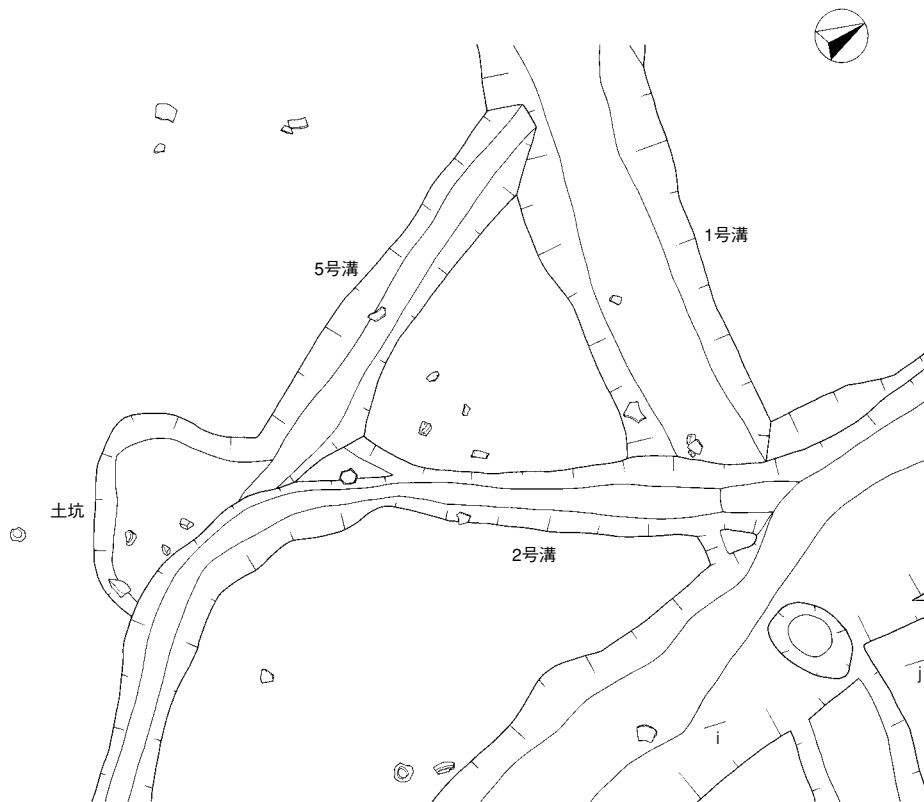
- 1 灰褐色砂質土層
- 2 灰色砂質土層
- 3 黄灰褐色砂質土層
- 4 濁灰褐色砂質土層

5号溝 第1セクション (南側)

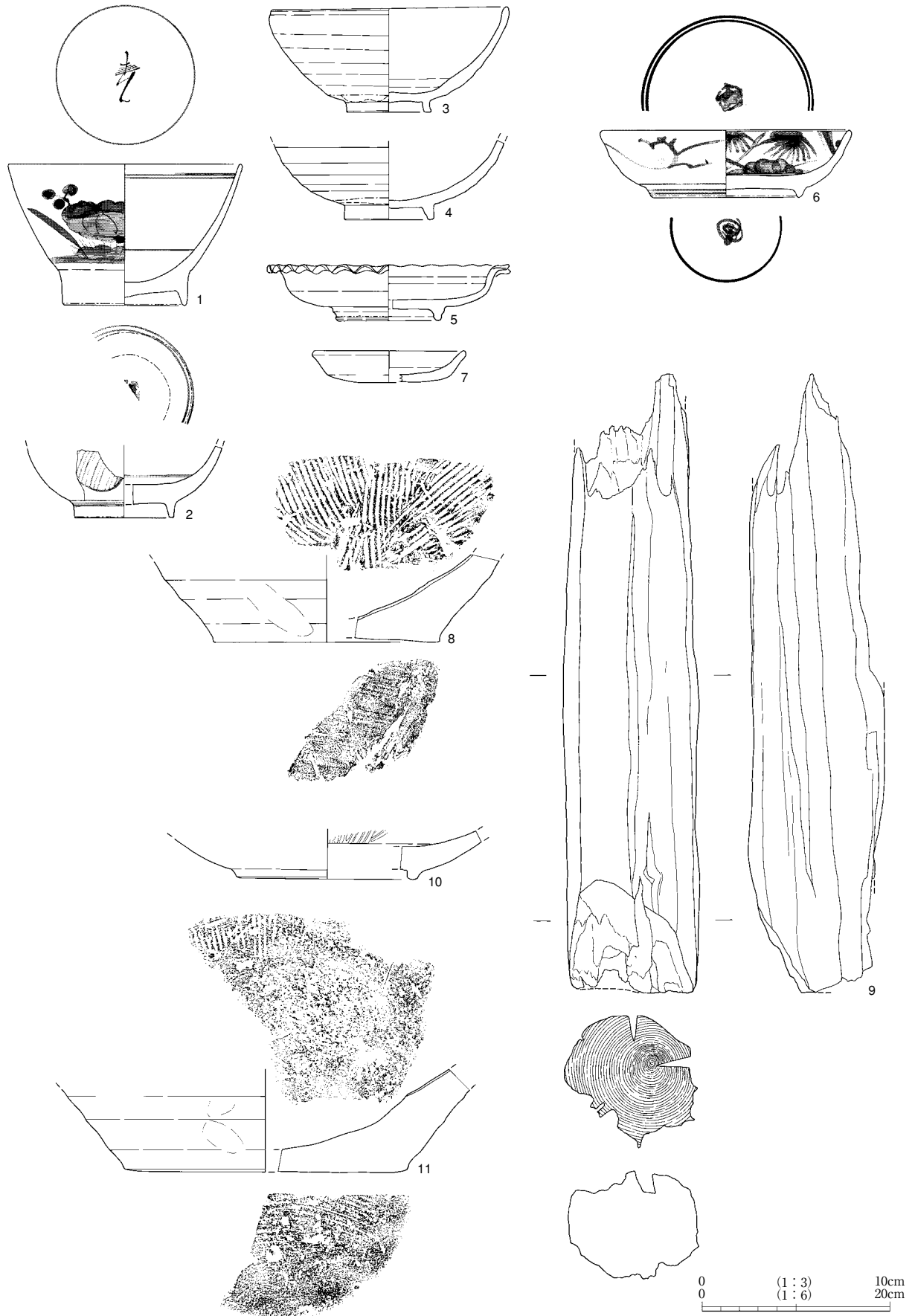


- 1 灰褐色砂質土層
- 2 灰色砂質土層
- 5 濁灰褐色砂質土層
- 6 暗灰褐色砂質土層

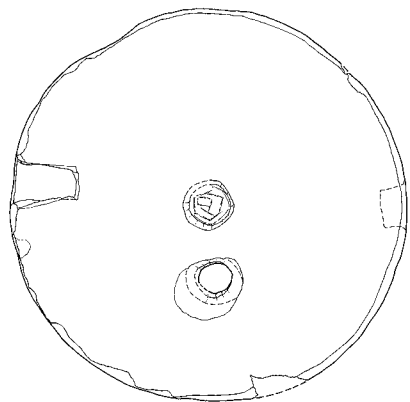
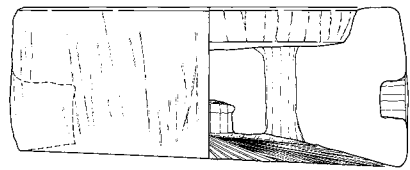
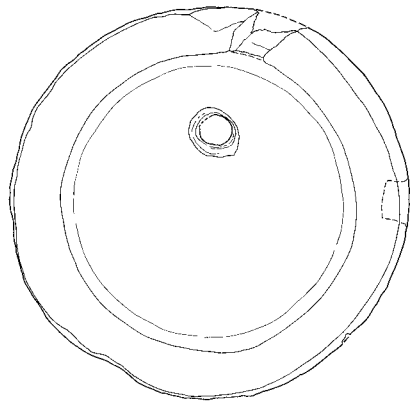
5号溝 第2セクション (北側1)



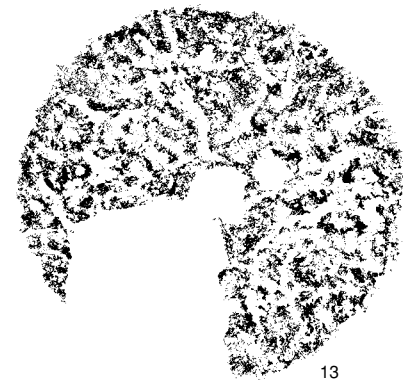
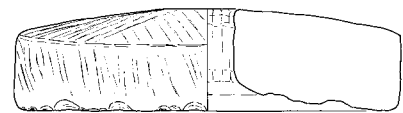
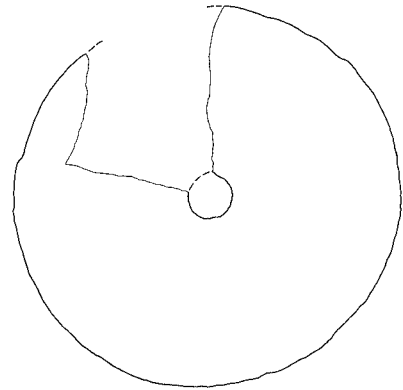
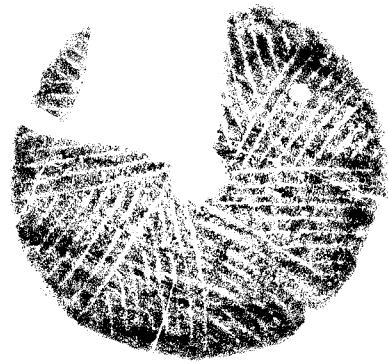
第10図 遺構実測図6 (S=1/60)



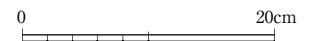
第11図 出土遺物実測図1 (S=1/3、9はS=1/6)



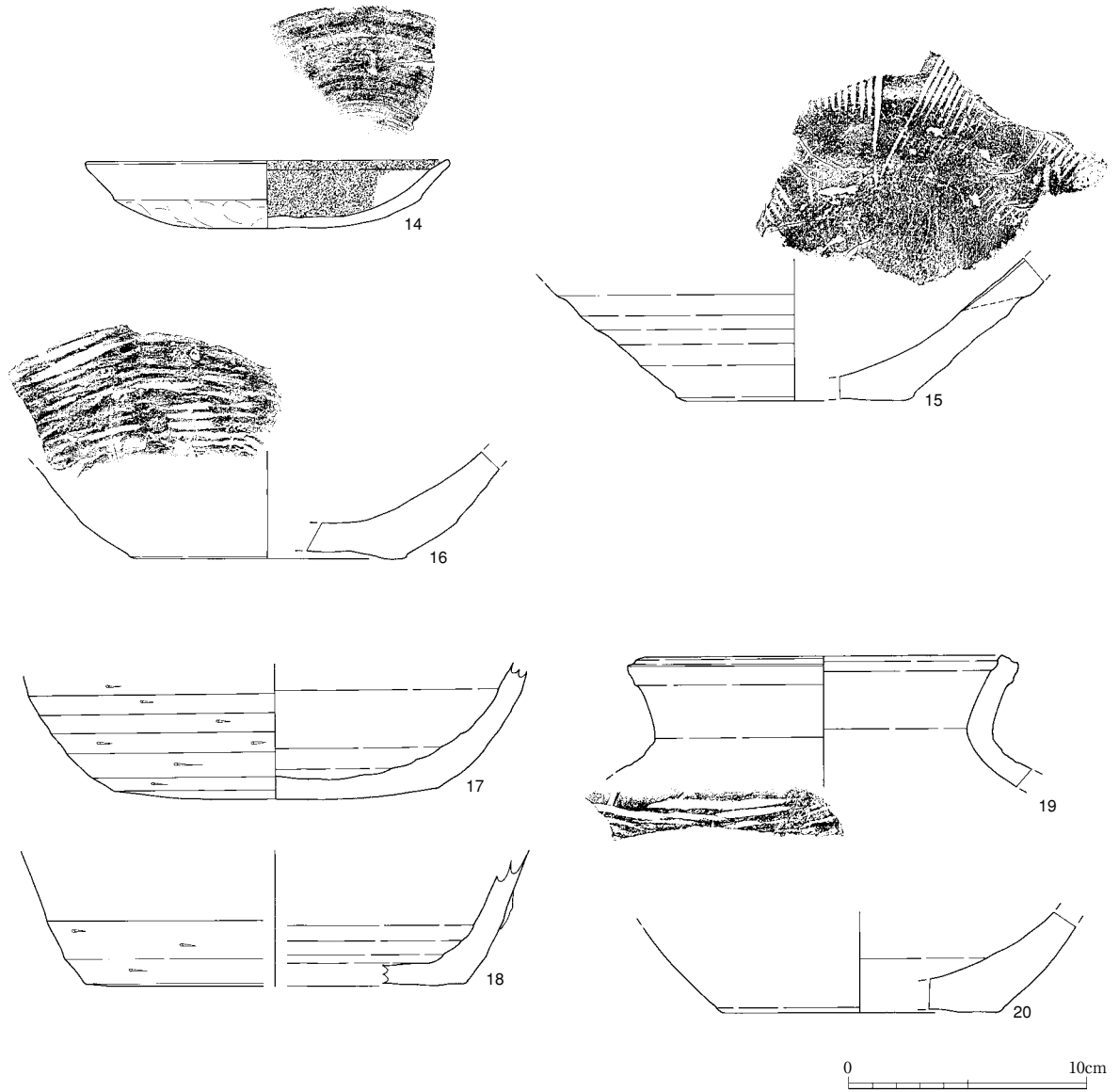
12



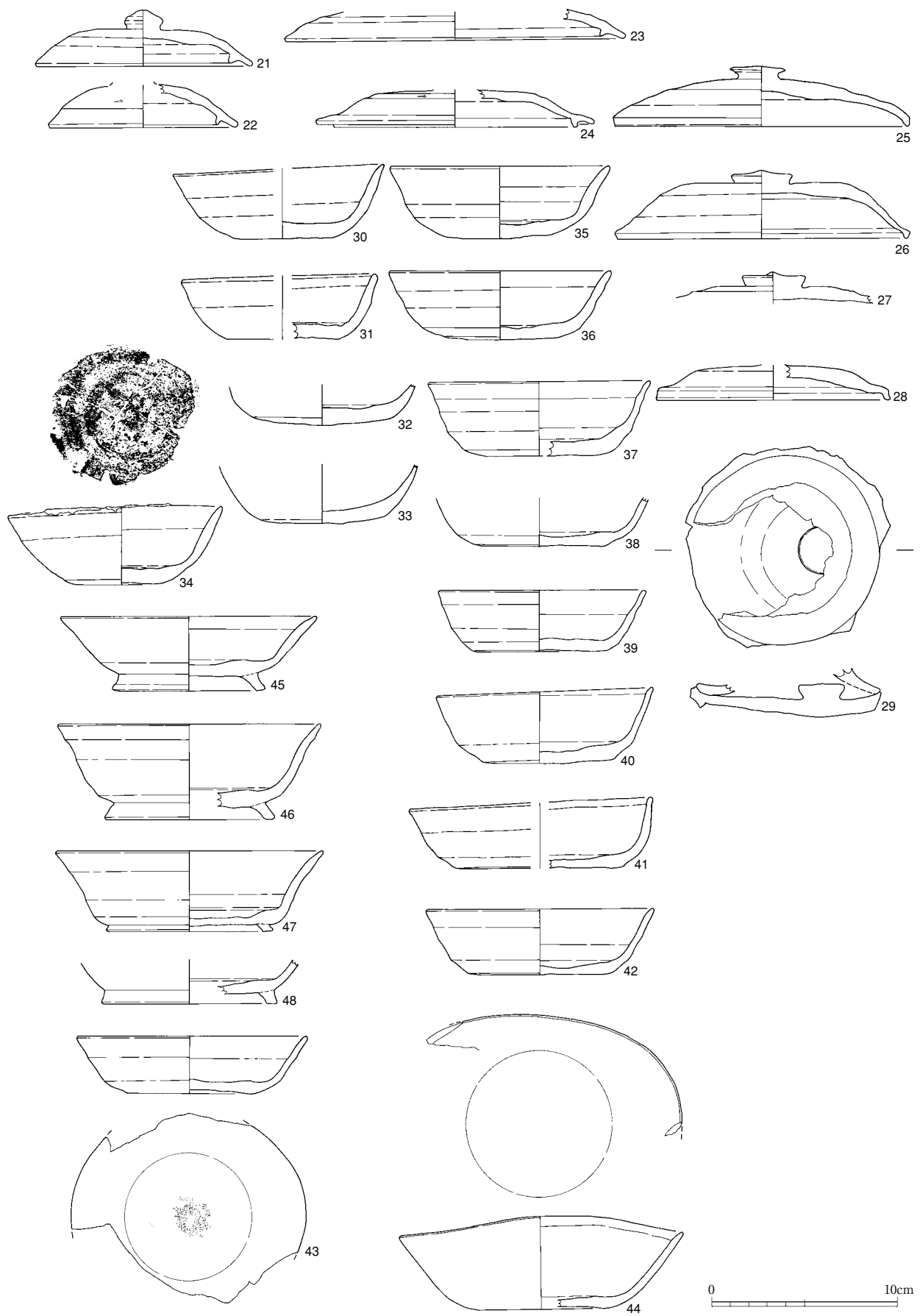
13



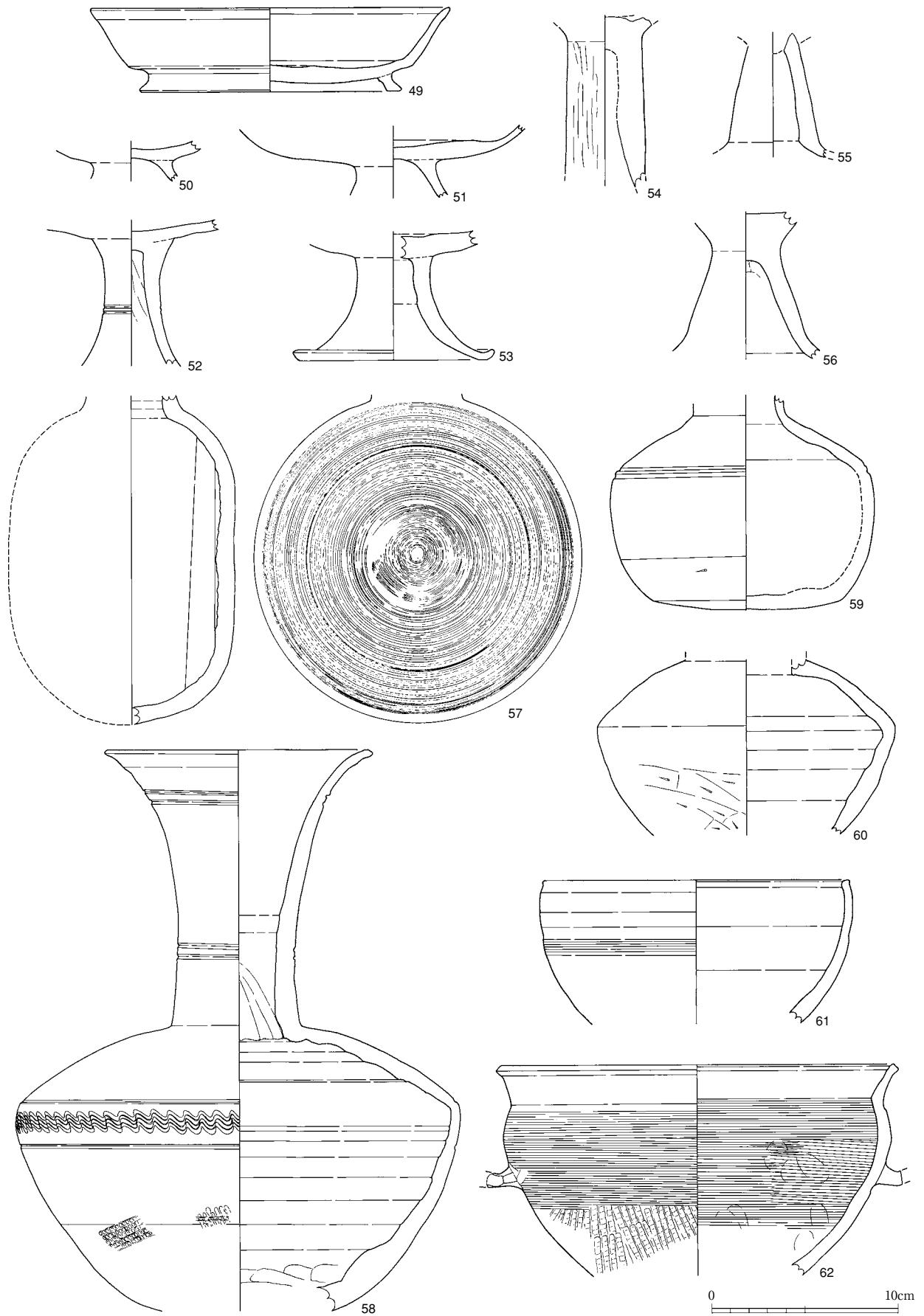
第12図 出土遺物実測図2 (S=1/6)



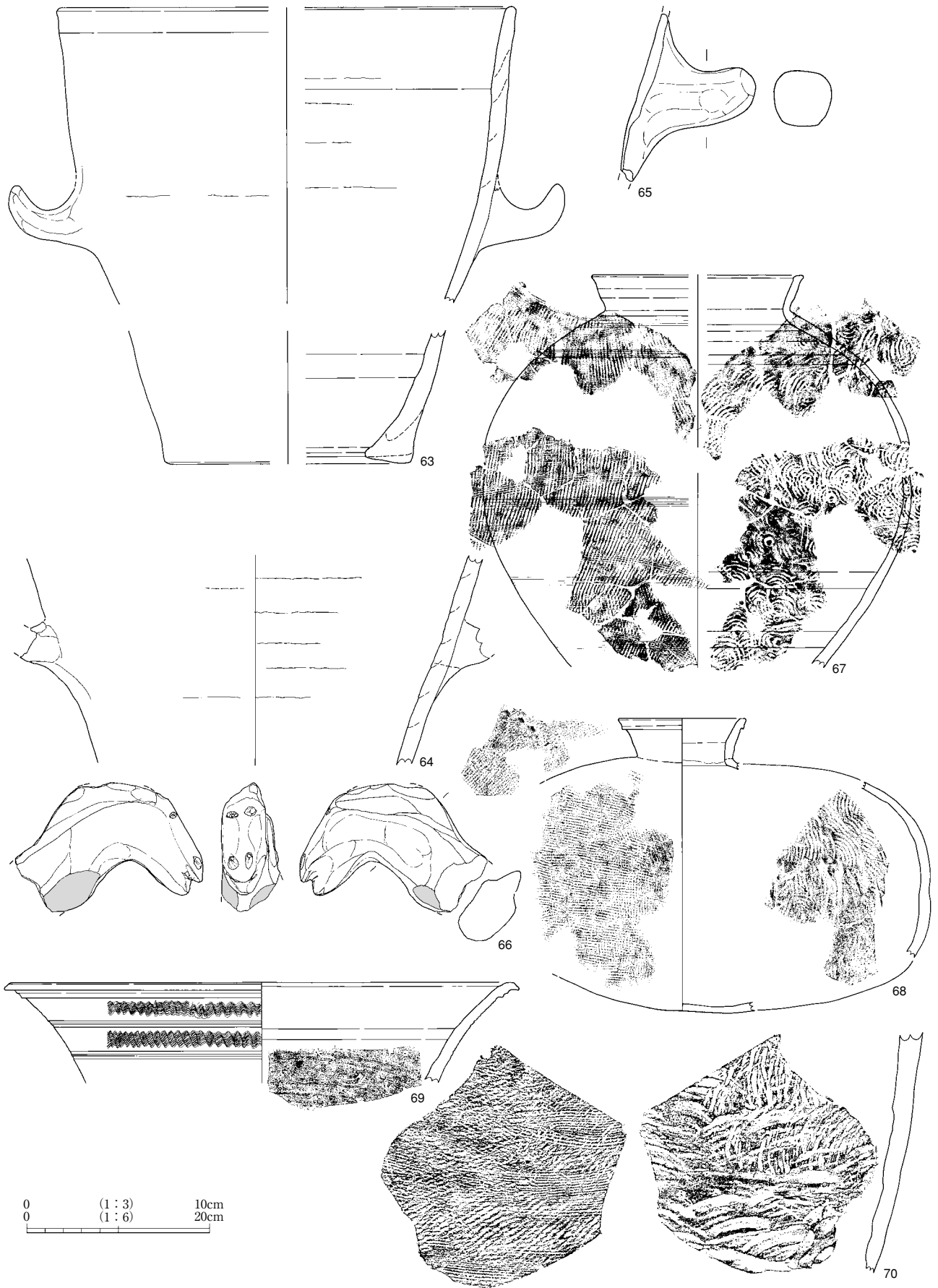
第13図 出土遺物実測図3 (S=1/3)



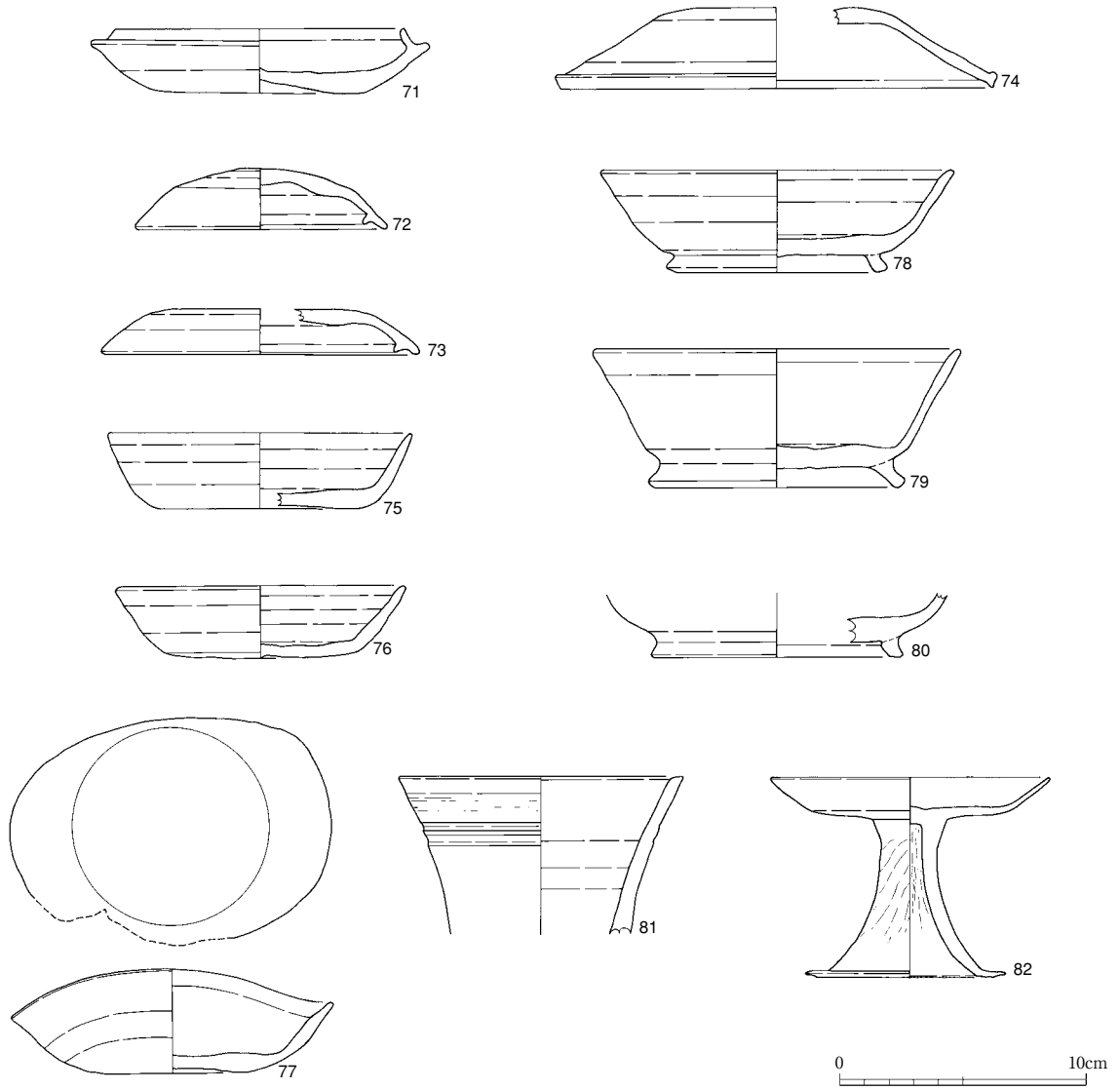
第14图 出土遺物実測図4 (S=1/3)



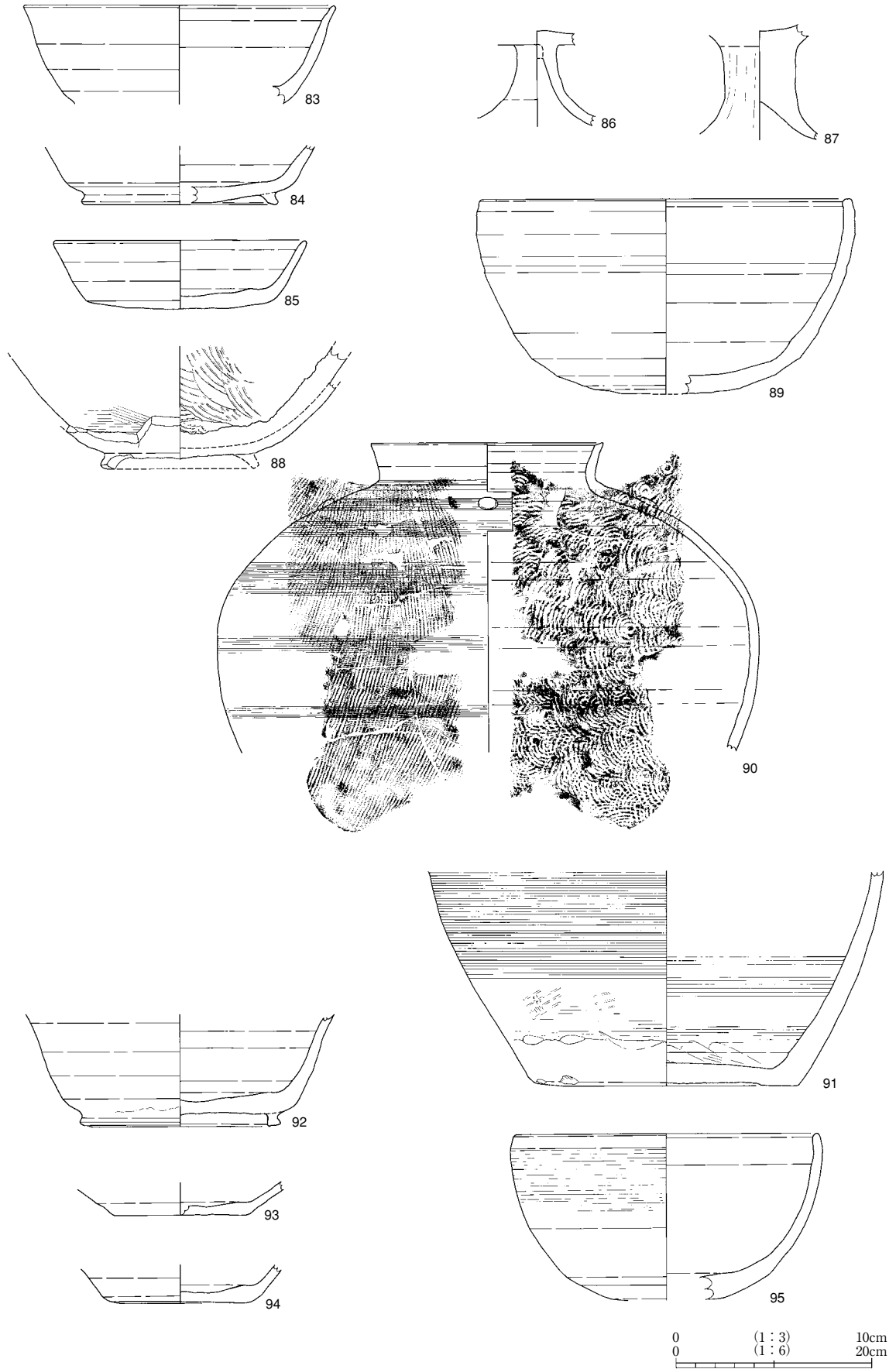
第15図 出土遺物実測図5 (S=1/3)



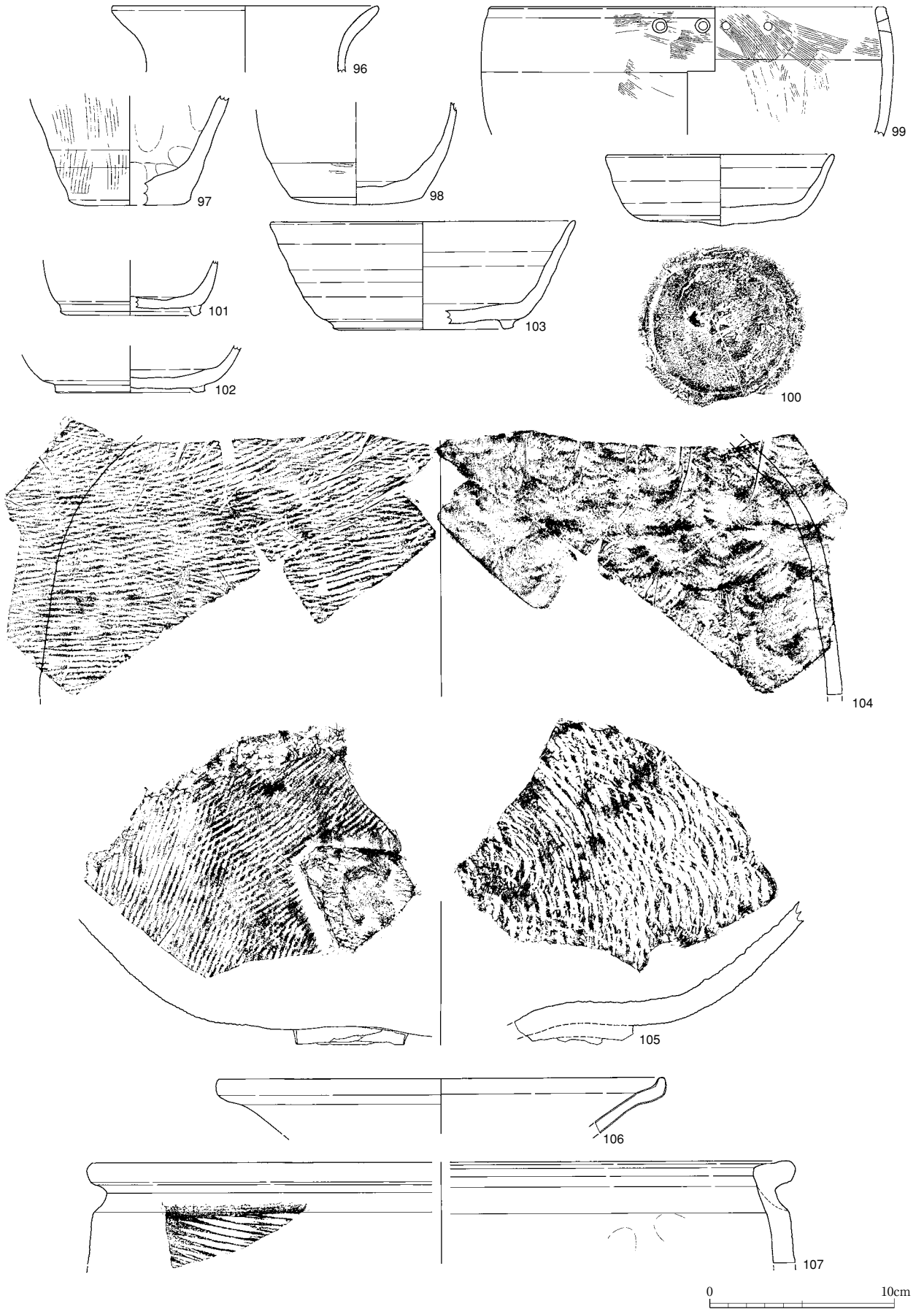
第16図 出土遺物実測図6 (S=1/3、67~69はS=1/6)



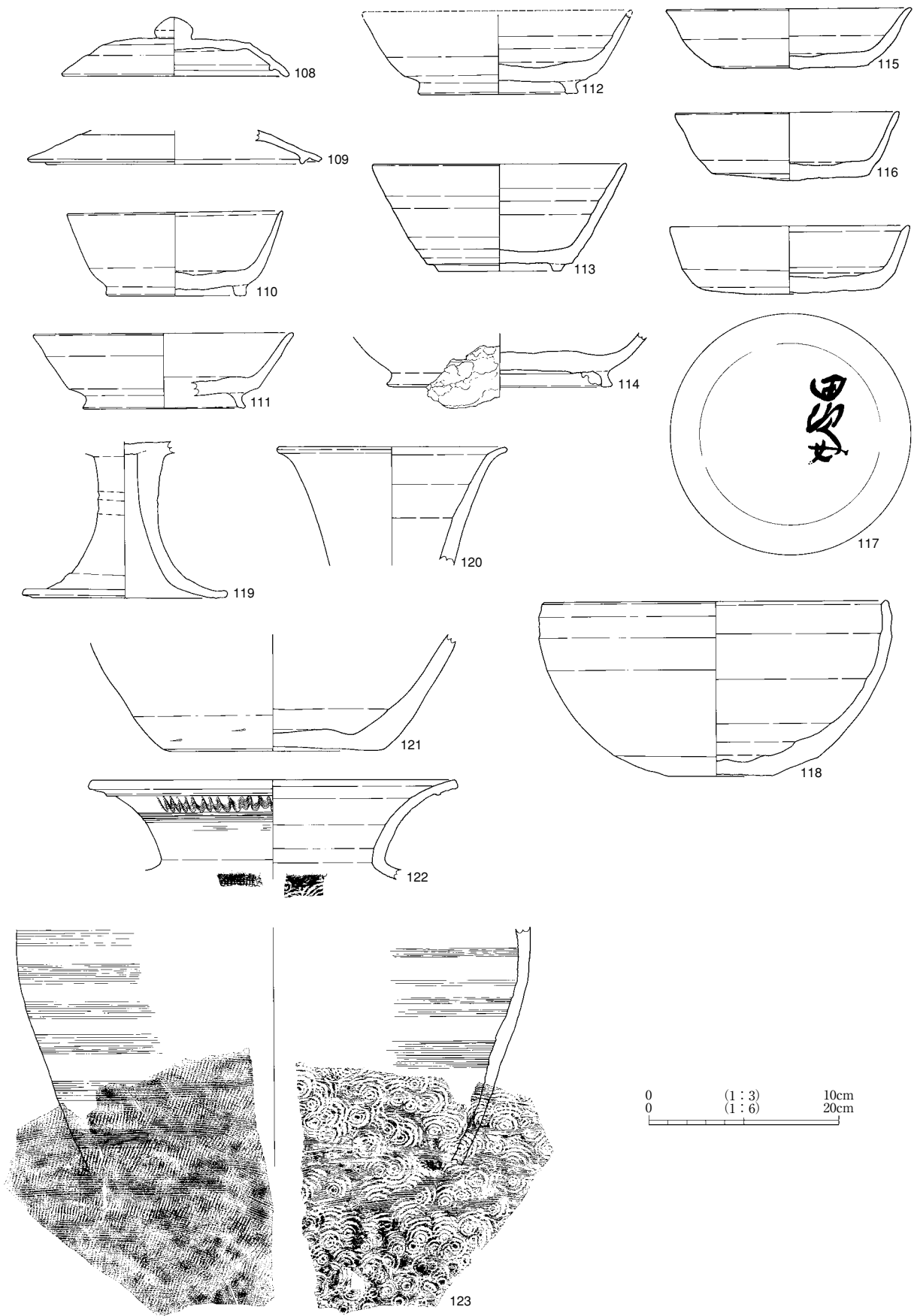
第17図 出土遺物実測図7 (S=1/3)



第18図 出土遺物実測図8 (S=1/3、90はS=1/6)



第19図 出土遺物実測図9 (S=1/3)



第20図 出土遺物実測図10 (S=1/3、122・123はS=1/6)

第2表 遺物観察表 1

種別	報告番号	出土地点	種別	器種	色調		胎土	調整		遺存度	その他
					内	外		内	外		
11	1	1号土坑	染付	広東碗	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部30/36、 底部6/36	高台部分に離れ砂溶着。内底面に 土層
	2	1号土坑	染付	碗	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部10/36	釉は均一に施され、透明感を帯びる。 気泡少ない。内外面ともに貫入なし。
	3	1号土坑	瀬戸	碗	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	18/36	白濁した透明釉を薄く内外に施し、細 かを貫入が入る。
	4	2号土坑	瀬戸	ひだ皿	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁12/36、 底部11/36	内外面に灰釉を施し、量付露胎。
	5	4号土坑	瀬戸・美濃	皿	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁13/36、 底部13/36	釉薬は透明感あり。貫入は見られず。 裏須の発色は良好。
	6	4号土坑	染付	皿	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁13/36、 底部9/36	焼成良
	7	B2区髹埴土 (4号土坑西)	土師器	皿	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	ナデ、ヨコナデ	焼成良
	8	B2区髹埴土 (4号土坑西)	珠洲	片口鉢	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口クロナデ、静止糸切り、 指頭匠痕	焼成良
	9	5号土坑	木製品	材	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外		
	10	7号土坑	中国青磁	盤	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	7/36	均一に施釉され、貫入は見られず。
	11	7号土坑 (底面)	珠洲	片口鉢	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部11/36	焼成良
12	石-1	1号土坑	石製品	上臼	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	完成品	抜き木挿入口が作り直されている。 1回目の挿入口：縦3.5×5×5、2回目 の挿入口：縦3×横3.7×奥行2.2
	石-2	1号土坑	石製品	下臼	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外		
	98	室状遺構 (中層)	土師器	灯明皿	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁11/36	内面煤付着
	99	室状遺構 (中層)	珠洲	片口鉢	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁4/36、 底部11/36	焼成良。卸し目は10条1単位
	98	室状遺構 (中層)	珠洲	小型罐	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部17/36	焼成良
	101	1号溝、A3区流土層	須恵器	瓶類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部7/36	
	89	1号溝	須恵器	瓶/壺?	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部5/36	焼成良
	87	1号溝	珠洲	壺	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁7/36	焼成良
	86	1号溝	珠洲	壺	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部10/36	焼成良
	21	2号溝	須恵器	蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	27/36	外面隆吹、重ね焼痕あり、つまみ窪 2.1cm
	14	11	2号溝	須恵器	蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	22/36
23		2号溝	須恵器	蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁11/36	焼成良
21		2号溝	須恵器	蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁9/36	焼成良
39		2号溝、B3区包	須恵器	蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	口縁23/36、 つまみ27/36	焼成良
17		2号溝、3号溝、4号溝、包	須恵器	蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	つまみ完形	焼成良
18		2号溝	須恵器	蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	5/36	滑着質料、焼成良
42		2号溝、A4区流土層	須恵器	高杯と蓋	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	4/36	焼成良
38		2号溝、B2・3区灰色粘土層 (溝状)	須恵器	無台杯	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	6/36	焼成良
33		2号溝	須恵器	無台杯	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部完形	焼成不良
41		2号溝	須恵器	無台杯	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	底部完形	焼成不良
24		2号溝	須恵器	無台杯	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内	外	不明	不明

第3表 遺物観察表 2

種別	報告番号	実測番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		胎土		調整		遺存度	その他
									内	外	内	外	内	外		
14	34	34	2号溝、4号溝、B2・3区灰色粘土層 (溝状)	須恵器	無台杯	11.3	5.9	4.2	灰白	灰白	粗砂、海綿骨針	ロクロナデ	ロケズリ、ヘラ切り	口縁14/36、底部完形	焼成良、滑着痕あり、内底部にヘラ記号	
	35	37	2号溝	須恵器	無台杯	11.7	5.8	3.9	灰	灰～褐灰	粗砂、海綿骨針多	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り、ナデ	口縁4/36、底部31/36	焼成良	
	36	36	2号溝	須恵器	無台杯	11.9	6.3	3.7	灰白	灰白～灰	粗砂、小礫	ロクロナデ、ヨコナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁9/36、底部完形	焼成良	
	37	9	2号溝、3号溝	須恵器	無台杯	(11.8)	(8.0)	4.0	灰白	灰白	粗砂多、海面骨針少、長石	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁8/36、底部10/36	焼成良	
	38	31	2号溝	須恵器	無台杯		7.0	(2.7)	灰白	灰	粗砂多、小礫少、石英、長石	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	口縁11/36、底部完形	焼成良	
	39	20	2号溝	須恵器	無台杯	11.0	7.2	3.3	灰	灰	粗砂多、小礫少、長石	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁11/36、底部完形	焼成良	
	40	28	2号溝	須恵器	無台杯	12.0	7.2	3.7~4.1	灰	灰、灰白	粗砂多、小礫少、石英、長石	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁16/36、底部21/36	焼成良	
	41	40	2号溝	須恵器	無台杯	(13.0)	(9.0)	3.5	褐灰	灰白～褐灰	細粗砂多、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	口縁11/36、底部12/36	焼成良	
	42	25	2号溝	須恵器	無台杯	12.1	7.7	3.5	灰白	灰白～灰	粗砂、小礫少、礫少、長石	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁13/36、底部完形	焼成良、外底に添付着	
	43	27	2号溝	須恵器	無台杯	12.2	6.8	3.1	灰	灰	粗砂、小礫少、長石	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁12/36、底部27/36	焼成良。焼け歪み顕著。	
	44	113	2号溝、A4区流土層、B3区包	須恵器	無台杯	(13.0)	6.8	(5.0)	灰	灰	海綿骨針多、石英・長石少	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁3/36、底部26/36	焼成良	
	45	26	2号溝	須恵器	有台杯	13.8	8.3	4.0	褐灰	褐灰	粗砂、細砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	口縁10/36、底部22/36	断面暗褐色	
	46	7	2号溝、A3区包	須恵器	有台杯	14.0	9.2	5.1	灰	灰	粗砂多、小礫少、長石	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、押さえナ	口縁7/36、底部27/36	焼成良	
	47	100	2号溝、A3・4区流土層、B3区包	須恵器	有台杯	14.3	9.0	4.4	灰白	灰	粗砂多、長石、海綿骨針	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、押さえナ	口縁10/36、底部22/36	焼成良	
48	6	2号溝、B2・3区灰色粘土層 (溝状)	須恵器	有台杯	9.5	9.5	(2.4)	灰	灰	粗砂多、長石	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り、ナデ、ヨコナデ	口縁19/36	貼り付け高台		
49	35	2号溝、A3・4区流土層	須恵器	有台杯	19.2	13.8	4.5	赤灰	褐灰	粗砂、小礫	ナデ、ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	16/36	焼成良		
50	30	2号溝	須恵器	高杯		(2.2)	(2.2)	灰白	灰白	粗砂、長石	不明	ロクロナデ	19/36	焼成良		
51	14	2号溝	須恵器	高杯		(4.0)	(4.0)	灰、灰白	灰、灰白	粗砂多、小礫少、石英、長石、海綿骨針	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ				
52	116	2号溝、雲状遺構、B2・2区包	須恵器	高杯		(7.9)	(7.9)	灰	灰	粗砂多、小礫少、長石	不定方向ナデ、ロクロナデ、シボリス	ロクロナデ、沈瀬				
53	19	2号溝、B2・3区灰色粘土層 (溝状)、B3区包	須恵器	高杯		10.8	(6.9)	灰	灰	粗砂、長石	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	底部9/36			
54	4	2号溝	土師器	高杯		(9.1)	(9.1)	黄橙、黒	黄橙～灰黄褐	粗砂多、石英、長石	ミガキ	ミガキ				
55	10	2号溝	土師器	高杯		(6.7)	(6.7)	淡黄	淡黄	粗砂、海面骨針、焼土塊	不明	不明		焼成良		
56	16	2号溝	土師器	高杯		(8.0)	(8.0)	灰白	灰白	粗砂、海面骨針、焼土塊	指頭圧痕	不明		焼成良		
57	117	2号溝、A4区流土層	須恵器	提瓶		(17.6)	(17.6)	灰色	オリーブ灰	粗砂	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、カキメ		焼成良。製作時の底部に当たる平面のみ残存。		
58	15	2号溝、ピット2、B2・3区灰色粘土層 (溝状)	須恵器	長頸瓶	9.0		(30.2)	灰	灰	粗砂多、礫少	ロクロナデ、ナデ、シボリス	ロクロナデ、ロクロケズリ、沈瀬、波状文、タタキ	口縁22/36、底部欠損、体部ほぼ完形、肩部15/36			
59	8	2号溝	須恵器	長頸壺		10.0	(11.5)	灰、灰オリーブ	灰、灰オリーブ	粗砂多、小礫少、長石	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ、ナデ、沈瀬	頸部～底部は完形	焼成良		
60	13	2号溝、B2・3区灰色粘土層 (溝状)、B3区包	須恵器	長頸壺?		(9.4)	(9.4)	灰	灰	粗砂多、石英、長石	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ				
61	32	2号溝、B3区包	須恵器	鉢鉢	16.4		(7.7)	灰	灰	小礫少	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメか?	11/36	焼成良		
62	5	2号溝、A3区流土層	須恵器	鉢	21.1		(11.3)	灰	灰	粗砂多、小礫少、長石、海面骨針少	ロクロナデ、カキメ、指頭圧痕、ナデ	ロクロナデ、カキメ、把	口縁3/36			
63	22	B3区2-3号溝間	土師器	甌		13.5	(7.3)	橙	褐灰	粗砂多	不明	不明	底部9/36	焼成並		
64	61	2号溝、3号溝	土師器	甌				橙	橙	粗砂多、礫少	不明	不明				

第4表 遺物観察表 3

棟目 番号	報告 番号	実測 番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		胎土	調整		遺存度	その他
									内	外		内	外		
16	65	29	2号溝	土師器	把手			(9.0)	灰黄橙、 黄橙	灰	粗砂多、小礫少、焼土塊、 海綿骨針	ハケ	ナデ		焼成良
	66	46	2号溝	土製品	土馬						雲母、赤色酸化粒微量、粗 砂多		ナデ		焼成並
	67	70	2号溝、3号溝、4号溝、A4区流土層、 B2・3区灰色粘土層 (溝状)	須恵器	甕	(22.8)		(39.7)	灰白	灰白	長石、白色砂	ロクロナデ、タタキ、横 ナデ	ロクロナデ、タタキ、カ キメ	口縁部7/36	焼成良
	68	69	2号溝、3号溝、4号溝、A4区流土層	須恵器	精瓶	13.6			灰	灰	粗砂多、小礫少、白色砂含	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ、タタキ、ナ デ	口縁部36/36	焼成良
	69	2	2号溝	須恵器	甕	54.9		(11.0)	褐灰	灰～褐灰	粗砂多、小礫少、長石	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ、沈線、波状 文	口縁部	焼成良
	70	3	2号溝	須恵器	甕			(13.2)	灰白	灰白	粗砂多、礫少、長石	タタキ	タタキ、カキメ		焼成良
	71	57	3号溝	須恵器	杯身	13.8		2.6	灰	灰～灰オ リーブ	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り		焼成良
	72	60	3号溝、2号溝	須恵器	蓋	10.3		2.5	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	口縁23/36	焼成良
	73	62	3号溝	須恵器	蓋	13.0		(1.9)	灰	灰	長石、白色粗砂、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	口縁9/36	焼成良
	74	64	3号溝	須恵器	蓋	18.0		(3.3)	灰	灰	長石、白色粗砂、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁9/36	焼成良
	75	66	3号溝	須恵器	無台杯	12.2	8.6	3.1	灰白	灰白	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後 圧痕	口縁6/36、 底部21/36	焼成良
	76	59	3号溝	須恵器	無台杯	11.5	7.9	3.0	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口縁15/36、 底部21/36	焼成良
	77	58	3号溝、包	須恵器	無台杯	(12.9)	5.8	(2.9)	灰	灰	長石、白色粗砂、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ほぼ完形	焼成良。大きなゆがみ有り。
	78	67	3号溝、B3区包	須恵器	有台杯	14.1	9.0	(4.2)	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデツケ、 ヘラ切り後圧痕	口縁15/35、 底部20/36	焼成良
	79	65	3号溝、B3区包	須恵器	有台杯	14.7	10.4	5.7	褐灰	灰	長石、白色粗砂、赤色酸化 粒、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデツケ、 回転ヘラ切り	口縁35/36、 底部15/36	焼成良
	80	75	3号溝	須恵器	有台杯		10.2	(2.6)	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底部6/36	焼成良
81	63	3号溝	須恵器	瓶	11.5		(6.4)	灰	オリーブ灰	長石、白色粗砂、赤色酸化 粒、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ、沈 線		焼成良	
82	43	3号溝	須恵器	高杯	11.2	8.2	8.1	灰白～黒	灰白～黒	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ	底部4/36	焼成良	
83	77	4号溝	須恵器	有台杯	15.8		(5.1)	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデツケ	口縁5/36	焼成良	
84	80	4号溝	須恵器	有台杯		10.1	(3.0)	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデツケ、 回転ヘラ切り	底部14/36	焼成良	
85	76	4号溝	須恵器	無台杯	12.8	9.6	3.6	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口縁3/36、 底部19/36	焼成良	
86	73	4号溝	須恵器	高杯			4.8	灰	灰	長石、白色粗砂、海綿骨針	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ナデ		焼成良	
87	74	4号溝	内黒土師器	高杯			(5.8)	暗灰	黄橙	長石、赤色酸化粒、海綿骨 針	ナデ	ナデ、ヘラ切り		焼成良。	
88	79	4号溝、A1・2区包	須恵器	杯と瓶		8.1と6.0	(6.3)	灰	灰	粗砂多、礫少	ロクロナデ?&青海波状タ タキ	ロクロナデ、ロクロケズリ &格子目状タタキ、カキメ		焼成良。溶着資料。	
89	78	4号溝、1号溝、2号溝、A4区流土層	須恵器	鉄鉢	18.7	4.5	10.0	灰	灰	石英少、長石、粗砂	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ			
90	68	4号溝、2号溝、3号溝、5号土坑、A3・4 区流土	須恵器	甕	23.6		(31.6)	灰白～灰黄	灰白～灰	小礫少、粗砂、細砂	ロクロナデ、タタキ	タタキ後ナデ、平行タタ キ、カキメ	15/36	焼成良	
91	81	5号溝	須恵器	瓶類		13.6	(11.0)	灰	褐灰	細砂多、粗砂、礫	ロクロナデ、カキメ、ナ デ	カキメ、ナデ、タタキ	底部27/36	焼成良	
92	82	5号溝	須恵器	有台杯		10.3	(5.8)	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデツケ、 回転ヘラ切り	底部完形	焼成良	
93	84	5号溝	須恵器	無台杯		7.1	(1.7)	灰	灰	細砂、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切 り後圧痕	底部17/36	焼成良	
94	83	5号溝	須恵器	無台杯		7.2	(2.0)	灰	灰	長石、白色砂	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切 り後圧痕	底部完形	焼成良	
95	85	5号溝	須恵器	須恵器	鉄鉢	15.4	5.8	8.5	灰	灰	長石、白色粗砂、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ、ケ ズリ	口縁7/36、 底部6/36	焼成良
96	55	B2・3区灰色粘土層 (溝状)	土師器	甕	14.4		(3.6)	黄橙	橙	砂少、赤色酸化粒、海綿骨 針	不明	不明	4/36	焼成良	

第5表 遺物観察表 4

種目 番号	報告 番号	実測 番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		胎土	調整		遺存度	その他	
									内	外		内	外			
19	97	56	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	弥生土器	甕	6.6	6.6	(6.0)	褐灰	黄橙	小礫、粗砂多	指頭圧痕	ハケメ	11/36	焼成良	
	98	53	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	須恵器	壺	7.1	5.6	(7.0)	浅黄橙	黄橙	小礫、赤色酸化粒	不明	不明	底部完形	焼成不良	
	99	54	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	弥生土器	鉢?	21.4			橙	橙	細砂、海綿骨針多	ハケメ、ハケ後ナデ?	ハケメ、ナデ	8/36	焼成良	
	100	48	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	須恵器	無台杯	12.3	9.0	3.9	灰白	灰	小礫少、砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り	口縁7/36、 底部24/36	外底部にハラ記号「X」	
	101	52	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	須恵器	有台杯		7.5	(3.0)	灰白	灰白	粗砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ハラ 切り	9/36		
	102	51	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	須恵器	有台杯		8.1	(2.6)	灰白	灰	粗砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り、 ナデ	24/36		
	103	47	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	須恵器	有台杯	16.4	9.9	5.9	赤灰	灰黄褐	粗砂多	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り、 ナデ	口縁5/36、 底部24/36		
	104	72	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	須恵器	甕			(14.8)	灰白	灰白	粗砂少、細砂	タタキ	平行タタキ		焼成良	
	105	71	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	須恵器	甕		(29.0)	(7.8)	灰白	黄灰	粗砂、小礫少	タタキ	平行タタキ	5/36	焼成良。底面に溶着片	
	106	49	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	中国青磁	盤	24.2		(3.0)			灰色の素地			4/36		
	107	50	B2・3区灰色粘土層 (瀧状)	珠洲	甕	38.0		(5.7)	灰	灰~黒	粗砂、小礫少	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、平行タタキ		焼成良	
	20	108	102	流土層	須恵器	蓋	11.7	3.5		灰	灰	長石、石英粒多	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ	23/36	焼成良
		109	103	流土層	須恵器	蓋	15.1	(1.8)		灰	黄灰	長石、石英少	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ	10/36	焼成良
		110	115	流土層	須恵器	有台杯	11.3	7.4	4.5	灰白	灰白	砂粒並、赤色粒微	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り	口縁19/36	焼成やや不良
		111	105	流土層	須恵器	有台杯	13.5	8.6	4.0	灰白	灰	粗砂、細砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り	口縁14/36、 底部27/36	焼成良
		112	109	流土層	須恵器	有台杯	(14.0)	8.5	4.3	灰色	灰色	砂粒多	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り	底部完形	焼成良。口唇部欠損
		113	108	流土層	須恵器	有台杯	13.3	6.4	5.7	灰白	灰~灰白	細砂、粗砂少	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ切り	4/36	焼成良
		114	104	流土層	須恵器	瓶類少		11.9	(4.0)	灰	灰	砂粒多、黒褐色粒	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ	9/36	焼成良、溶着
		115	110	流土層	須恵器	無台杯	12.8	8.3	3.1	灰白	灰白	粗砂、小礫	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り後 ナデ	7/36	焼成良
116		45	包含層	須恵器	無台杯	11.7	8.3	3.6	灰白	灰白~黄灰	粗砂、小礫少	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り	口縁7/36、 底部31/36	焼成良	
117		追	流土層	須恵器	無台杯	12.5	9.6	3.6	灰	灰	微細~3mm弱の石英・長石多	ロクロナデ	ロクロナデ、ハラ切り	口縁9/12	焼成良、外底部に墨書	
21	118	106	流土層	須恵器	鉢鉢	17.9	5.5	9.2	灰	灰	砂粒多、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ、ナ デ	口縁13/36、 底部完形	焼成良	
	119	107	流土層	須恵器	高杯		10.8	8.3	灰	灰	砂粒多	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	底部23/36、 脚部完形	焼成良	
	120	112	流土層	須恵器	瓶類	11.9		(6.3)	灰	灰	砂粒多、黒色粒	ロクロナデ	ロクロナデ	7/36	焼成良	
	121	93	流土層	須恵器	瓶類		11.6	(6.1)	灰白	浅黄橙	粗砂多、小礫少、長石、焼 土塊	不明	ケズリ		焼成不良	
	122	114	流土層、2号溝	須恵器	甕	38.2		(10.6)	灰	灰	長石粒少、石英粒少、粗 砂、細粗砂多	ロクロナデ、青海波状押 捺	ロクロナデ、カキメ、平 行タタキ	口縁9/36	焼成良	
	123	111	流土層	須恵器	甕				灰	灰	粗砂、細砂	同心円状押捺、カキメ	格子目状タタキ、カキメ 部片	底部付近の体 部片	焼成良	



遺跡周辺の航空写真



調査前風景（南西から）



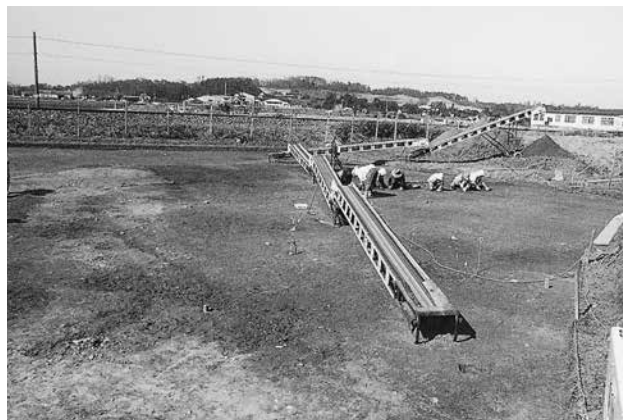
調査区遠景（南西から）



調査区完掘状況（南から）



表土除去作業（南から）



遺構検出作業（南東から）



遺構掘削作業（南から）



遺構掘削作業（西から）



調査区完掘状況（南から）



A・B 1～3区完掘状況（南東から）



A・B 1～4区完掘状況（南東から）



A・B3区完掘状況（南から）



拡張区完掘状況（南から）



1号土坑上層礫群出土状況（南から）



3・4号土坑完掘状況（南から）



5～7号土坑・3号溝完掘状況（南西から）



6号土坑底板検出状況（南東から）



8～10号土坑完掘状況（南西から）



1号溝第1セクション（東から）



2・3号溝土層断面（南から）



2号溝遺物出土状況（南西から）



1号溝完掘状況（西から）



2・3号溝完掘状況（南から）



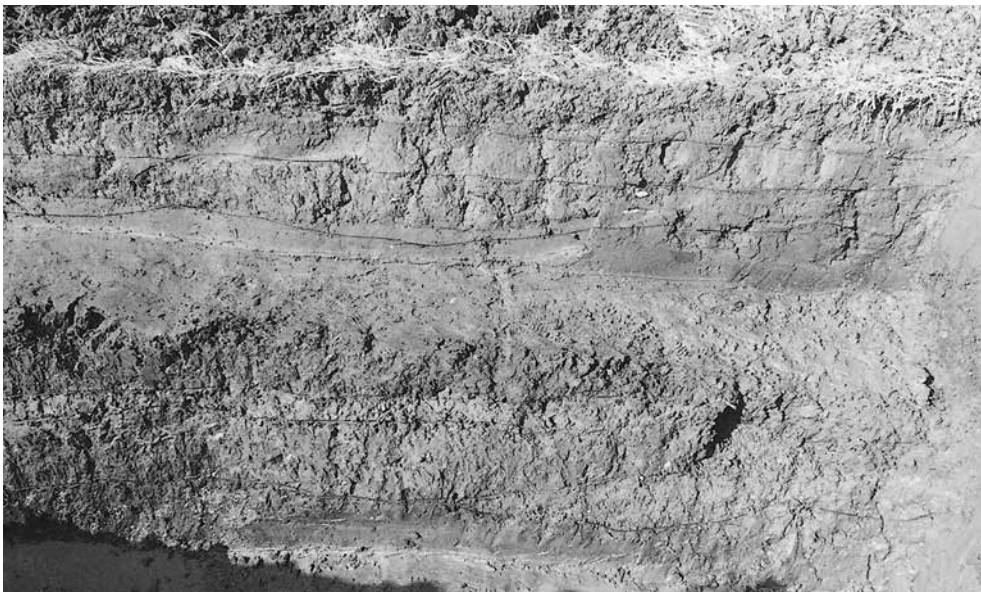
5号溝完掘状況（南西から）



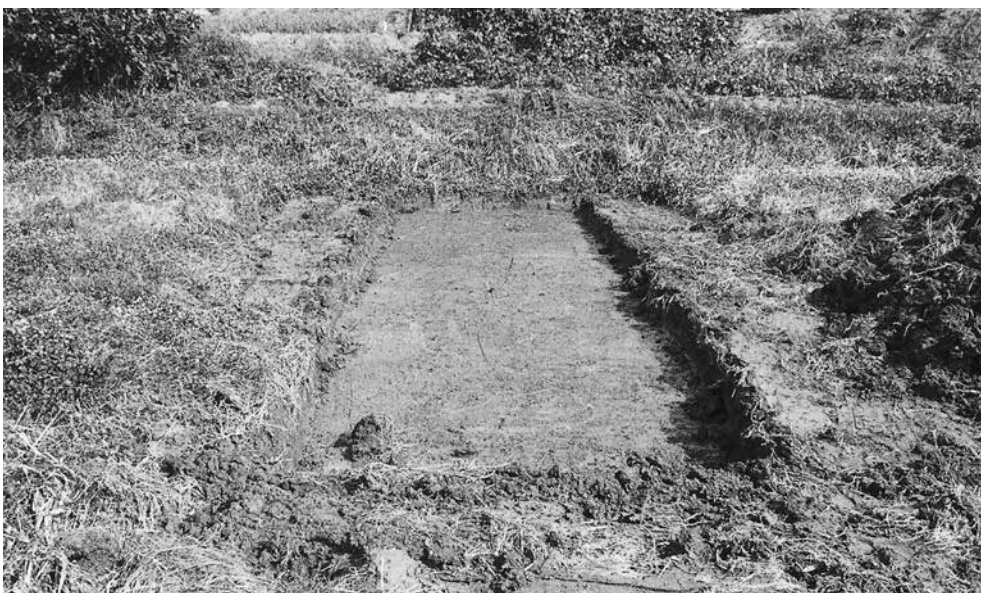
室状遺構完掘状況（南東から）



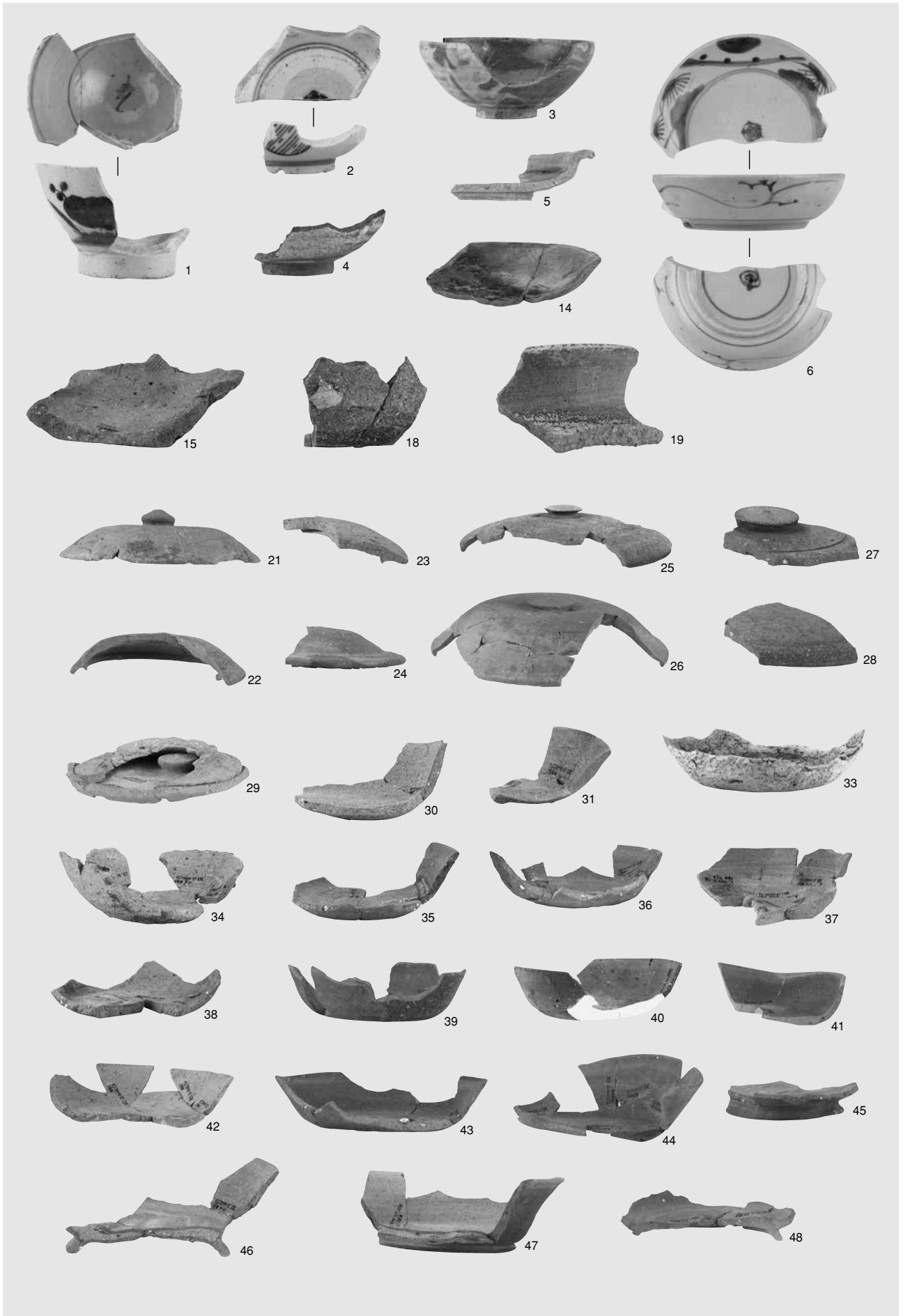
東方試掘トレンチ（下段）近景

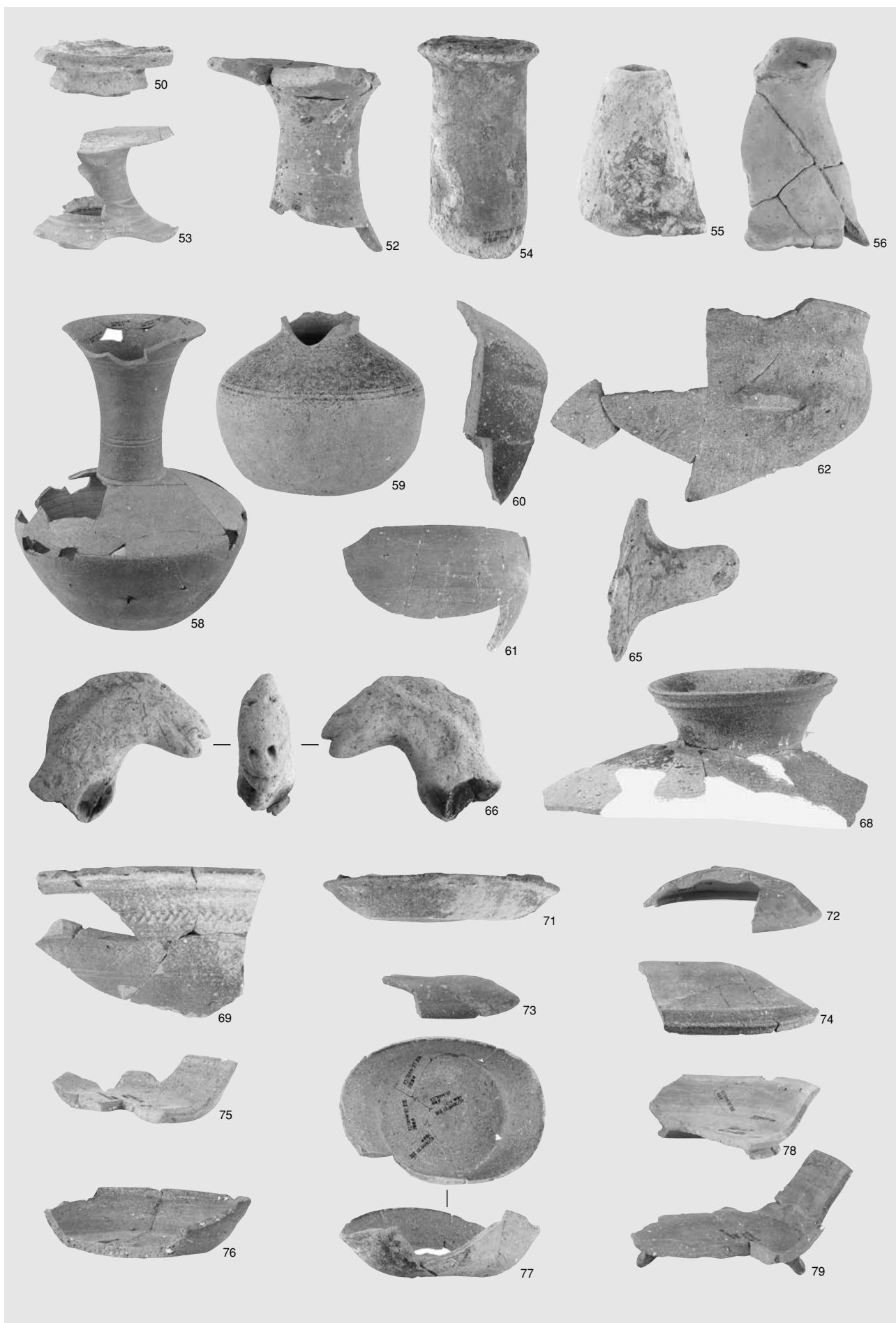


同上土層断面

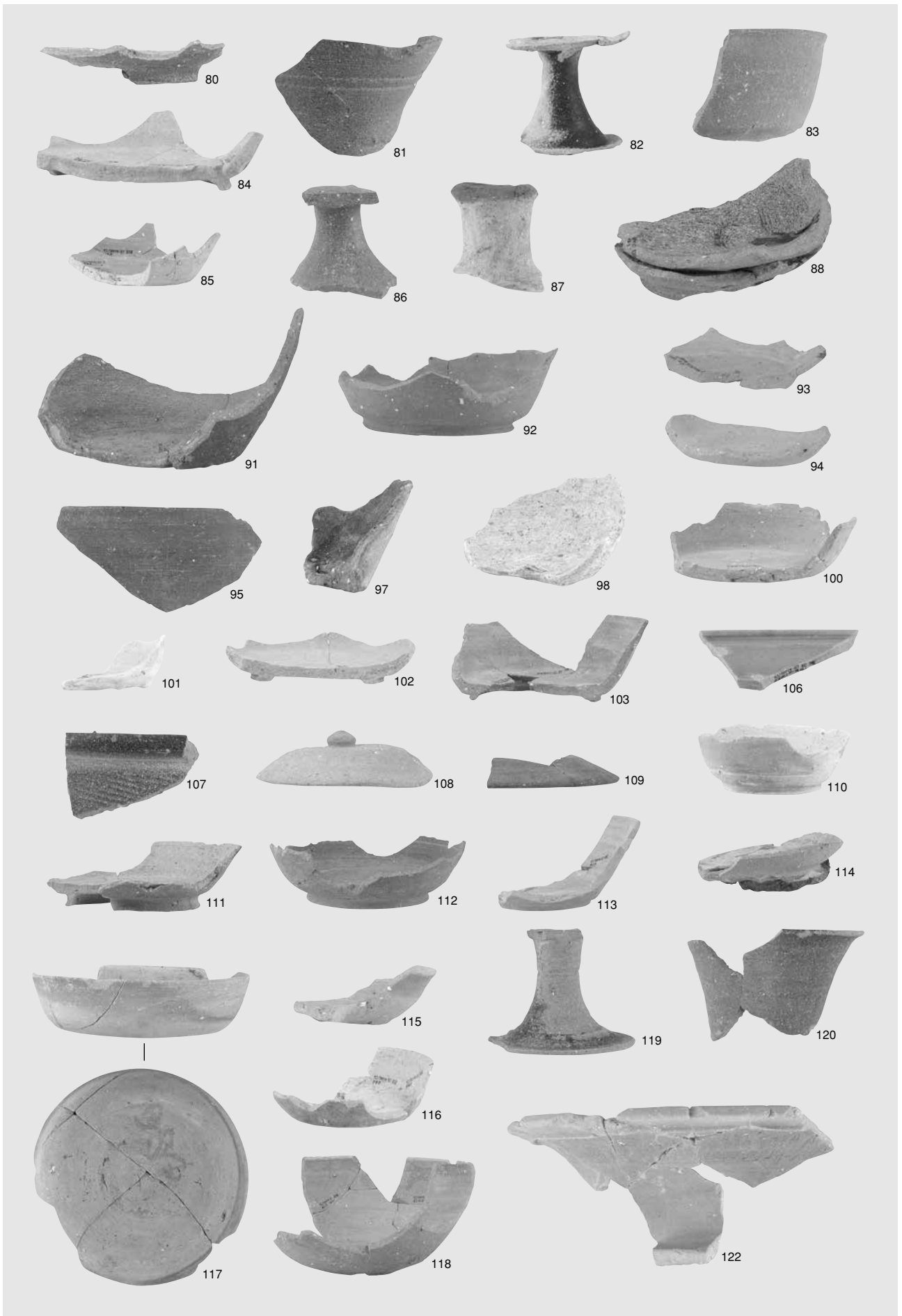


東方試掘トレンチ（上段）近景





遺物 2



報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうだつしみずちょう たこのふるやしきいせき							
書名	宝達志水町 竹生野フルヤシキ遺跡							
副書名	県単道路改良事業一般県道向瀬杉野屋線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	垣内光次郎、岩瀬由美							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たこの 竹生野フルヤシキ いせき 遺跡	いしかわけん はくいぐん 石川県羽咋郡 ほうだつしみずちょう 宝達志水町 たこの 竹生野地内	17386	30064	36度 50分 1秒	136度 46分 3秒	19871015 ～ 19871226	640㎡	道路特殊 改良1種 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
竹生野フルヤシキ 遺跡	集落	古墳時代～古代	溝		須恵器、土師器		土馬出土	
	集落	中世～近世	溝、土坑		珠洲焼			
要約	丘陵裾に広がる平坦面に立地する集落、及び縁辺部である。古墳時代～古代の溝中や包含層等からは多量の須恵器が出土した。また、古代の溝からは土馬が出土しており特筆される。PDFあり。							

宝達志水町 竹生野フルヤシキ遺跡

発行日 平成21(2009)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 小林太一印刷所